

---

横 浜 都 市 デ ザ イ ン  
未 来 会 議  
記 録 誌

---

令和5年3月

横浜市 都市整備局 都市デザイン室

# 横浜都市デザイン 未来会議 記録誌

## 目次

1	2022 年度未来会議について.....	1
	未来会議開催の趣旨 .....	1
	開催までの経緯 .....	1
	ワーキングの趣旨 .....	2
	ワーキングの流れ .....	2
	ワーキングテーマについて.....	2
	ワーキング参加者 .....	3
2	都市デザインへのレクチャ .....	4
	各回のレクチャとワーク概要.....	4
	レクチャ陣の話題提供の内容.....	6
3	皆で描くこれからの都市デザイン.....	18
	テーマ1：都市デザイン横浜の継承と革新〈定義班〉 .....	18
	テーマ2：都心部の可能性〈都心班〉 .....	23
	テーマ3：海をひらく〈海班〉 .....	29
	テーマ4：水と農と緑のある暮らし〈郊外班〉 .....	35
	テーマ5：横浜のコミュニティ再生〈コミュニティ班〉 .....	41
	個人ワークへの講評 .....	49
4	これからの都市デザインに向けて.....	50
	これからの都市デザインの考え方 .....	50
	【未来会議】を踏まえたこれからの都市デザインの方向性.....	51

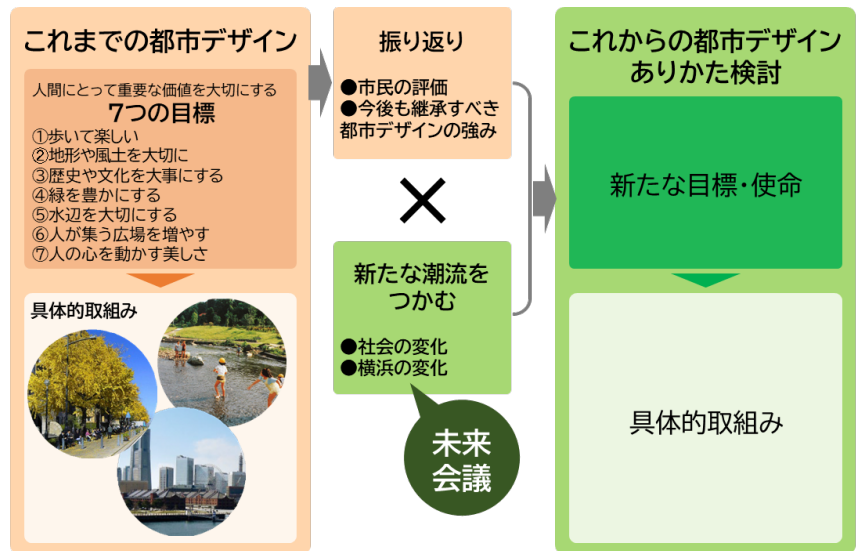
# 1

## 2022 年度未来会議について

### 未来会議開催の趣旨

#### ■ 未来会議の位置づけ

横浜都市デザイン 50 周年記念事業の「都市・横浜の『未来を描く』」パートの一環として、新たな潮流をつかみ、未来の横浜の望ましい暮らしを描くことを趣旨に開催しました。



#### ■ 未来会議の開催目的

「未来会議」は、庁内に留まらず市民、企業と様々な主体とともにこれからの都市デザインの在り方を考える場として企画しました。横浜での住む、働く、遊ぶなどの暮らし全般の観点からも社会や横浜の状況の変化を捉え、新たな潮流をつかむとともに、都市横浜の未来を共に考え、個性と魅力あるまちづくりについての幅広いアイデアを行政と市民が共有することを主な目的としました。

### 開催までの経緯

これまで、横浜市では人間にとって重要な価値を大切にしながら都市デザイン行政により個性と魅力あるまちづくりに取り組んできました。令和 3 年度で都市デザイン 50 周年を迎え、令和 4 年度は今後の展開を考えていくタイミングにありました。

「未来会議」への参加を市ホームページで募集し、横浜市内在住、在勤、在学の方から計 41 名のご参加をいただくこととなりました。

## ワーキングの趣旨

- ① 価値観が多様化し、社会や横浜の状況が変化する中で、都市の新たな潮流をつかむ。
- ② 個性と魅力ある横浜の都市デザインの今後の展開へ向けて、幅広いアイデアを庁内外のメンバーで共有する。

## ワーキングの流れ

全6回のうち、前半は検討テーマごとに設定したグループで議論を深め、第4回にグループワークの発表を行い、後半は個人アイデアの検討を深め、第6回に個人ワークを発表しました。また各ワーキングの議論を高めることを狙いとして、各回話題提供として有識者からのレクチャを行いました。



## ワーキングテーマについて

将来の横浜を考える上で、地域別の個性や課題、時代の変遷に伴い取り込むべき新たな潮流を踏まえ、5つの班に分類しました。

班名	テーマ	主な検討事項
定義班	都市デザイン横浜の継承と革新	未来の普遍的価値を見つける
都心班	都心部の可能性	都心部の新たな可能性を考える
海班	海をひらく	海の価値を高める
郊外班	水と農と緑のある暮らし	内陸部の新たな価値を探す
コミュニティ班	横浜のコミュニティ再生	現代のコミュニティの在り方を考える



## ワーキング参加者

参加者は、市民、学生、会社員、市職員など多様なメンバーとなりました。TAとして都市デザイン室職員が入り、ファシリテーションを行いました。

### テーマ1：都市デザイン横浜の継承と革新〈定義班〉

メンバー	TA
安食 真      小倉 有美子      大嶽 洋一      下吹越 香菜      辻 圭介	桂 有生
南雲 岳彦      韓 昌熹      藤巻 りほ      結城 直紀	

### テーマ2：都心部の可能性〈都心班〉

メンバー	TA
遠藤 貴也      高山 亮太      萩原 史織      久継 太郎      福田 和博	土師 朝子
三上 奈穂      森 由香      横田 大輔	小寺 志保

### テーマ3：海をひらく〈海班〉

メンバー	TA
奥澤 理恵子      斎藤 悠宇      新村 浩子      田邊 優里子      土田 彬人	星 直哉
永松 大樹      藤原 一也      船本 由佳	

### テーマ4：水と農と緑のある暮らし〈郊外班〉

メンバー	TA
河合 太一      黒羽 千晴      斎藤 優太      立山 晴香      野澤 雄佑	岡部 正嗣
長谷井 裕久	

### テーマ5：横浜のコミュニティ再生〈コミュニティ班〉

メンバー	TA
石井 亜紀子      植松 詞子      川原 宏美      楠本 藍      小林 野渉	目黒 大輔
鈴木 真帆      高村 典子      林 彰広      馬立 歳久	盛田 真史

# 2

## 都市デザインへのレクチャ

### 各回のレクチャとワーク概要

#### ■第1回

##### レクチャ

野原 卓 氏

横浜国立大学准教授

「都市デザインでまちを豊かにする」



横浜市の都市デザインについて、具体的な取組事例に触れながらその意義や意図を明らかにしていった。将来の都市デザインの可能性が示され、未来会議の参加者に幅広いアイデア創発を投げかける内容となった。

##### レクチャ

三輪 律江 氏

横浜市立大学教授

「『暮らす』から見る横浜の未来」



未来を考える上で重要なポイントとして「ケア」を挙げ、今後の都市デザインで扱うべき領域の一つとして議論を促した。暮らしの中で自発的な相互ケアを促す都市デザインの重要性、という新たな視点が与えられるレクチャであった。

#### ■第2回

##### レクチャ

滝澤 恭介 氏

水辺総研取締役、  
ランドスケーププランナー

「都市のレジリエンスを高める環境と社会のデザイン」



気候変動における都市特有の災害リスクと、国の治水方針である「グリーンインフラ」の考え方が示された。その上で、横浜市の緑と河川環境の特徴を踏まえながら具体的な取組事例を示した。河川の流域全体で関係者が連携したまちづくりの重要性と可能性を感じさせるレクチャとなった。

##### ワーク：検討の方向性の共有

各グループの顔合わせおよび自己紹介。

TA からテーマと主な検討事項の方向性を示した上で、第2回に向けた課題を説明した。



##### ワーク：各テーマの掘り下げ 他の意見の取入れ

各メンバーの課題発表。それぞれの意見や考えを受容し、自分の考えを深めるきっかけとした。

発表を踏まえ、グループの意見を整理・集約する方向性・方針に関してOTAが中心となって議論した。



## ■第3回

### レクチャ

伊藤 大貴 氏

ソーシャル・エクス  
代表取締役

「社会課題と企業と公共」



公共サービスの変容と社会課題解決に取り組む民間企業の変化に触れ、「逆プロポ」という新たな官民連携の形を示した。他自治体の事例を踏まえ、横浜市の持つ可能性を想起させる内容となった。

### ワーク：グループ内で実現したいことを共有

各メンバー間の「実現したい暮らし」を共有し、グループの共通認識に落とし込む議論を進めた。

併せて、中間発表の役割分担を決定した。



## ■第4回

### 対談

羽藤 英二 氏

(×都市デザイン室長 光田)

東京大学教授

「都市はこれから  
どこへ行くのか？」



光田室長のプレゼン内容を踏まえ、都市デザインの役割や横浜市のアイデンティティに関する考えを深める議論を行った。テクノロジーの進展による社会変容と横浜の可能性を見据えながら、メンターを交え幅広い視点で未来の都市を描く対談となった。

### グループワークプレゼン

各グループの代表者が作成したスライドに沿ってプレゼンを行った。

発表後、今後の個人ワークにつながる総括としてメンターの野原氏、三輪氏および羽藤氏より講評があった。



## ■第5回

### レクチャ

坂倉 杏介 氏

東京都市大学准教授

「これからのコミュニティデザイン  
とウェルビーイング」



今後のコミュニティ形成のありかたや、ウェルビーイングとまちづくりの関係性について、これまで実践してきた活動事例を交えて示された。小さな活動が起こすイノベーションの重要性など、未来に向けて様々な期待を予感させるレクチャとなった。

### ワーク：アイデア創発

個人ワークの第1回目。各メンバーがアイデアを持ち寄り、班ごとに発表した。

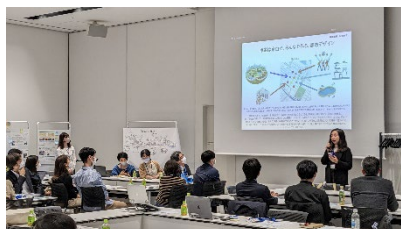
メンバーからの意見をもとに、各発表内容のブラッシュアップを図った。



## ■第6回

### 個人ワークプレゼン

これまでの議論を個々の課題解決に向けたアイデアに落とし込み、グループごとにプレゼンを行った。





野原 卓 氏

### 都市デザインでまちを豊かにする

#### 都市デザイン（の本質）とは？

横浜未来会議のテーマは『横浜(という都市)の未来を考える』ことですが、サブテーマは『都市デザインを使って横浜の未来を考える』だと考えています。都市デザイン室を始めとした横浜市の皆さんは、都市デザインという武器を使いながら、横浜市の中で多くのまちづくりを展開してきました。50年が経過する中で、その武器をどのように使えばいいのか、どのような武器であればよいのかということも、今回併せて考えてもらえれば嬉しいです。

都市デザインとは何か、と思う人もいると思います。広義で捉えれば、都市は全てデザインされている、全てのまちには都市デザインがあると言うこともできます。都市は必ず人間が造っているのです、何らかの意図や狙いの下にできています。

しかし、都市にはさまざまな人が集まり、多くの人がいる一方で、場所は一つしかありません。そこを豊かな場所にするためには、大きな視点でどのような方向を目指すのかということと、小さな視点でどのようにあるべきなのかということと、合わせながら考えていかなければなりません。その手つなぎの方法を考えることが都市デザインだと思っています。



#### 大きなまちづくりと小さなまちづくりのつなぎ手

まち全体の魅力づくりそのものと、それが一つ一つの場面や場所に落とし込まれ、皆が豊かさを感じることができることの、両方がつながりながら実現していかなければ、より良い豊かな場所ではできません。そのつなぎ手が、都市デザインという武器です。

例えば横浜市では、歩行者に対して人間的な都市空間をつくるため、いろいろな工夫をしながら、人が楽しく、安全に歩くことができるようにしています。また、さまざまな活動を行うことができる場がたくさん用意されています。それぞれの場所では、さまざまな活動が展開されています。

横浜市都心臨海部をみると、ある時期から、緑の軸線と呼ばれるものが描かれています。まちの奥から海に向かって出て行くことができるような場所を、公共空間を使ってきちんとつなぐことができないかということを考え、さまざまな活動をしてきました。50年前にまちの目標を定め、その後時間をかけていろいろなものがつくられてきました。

50年前は、横浜市の臨海部で海に出られるのは山下公園だけで、残りは全て産業用地でした。オセロを黒から白にするように、少しずつ空間整備を重ねてきた結果として、今のようにウォーターフロントを楽しく歩くことができるようになったのです。

#### まちを替えるプログラム（仕組み）

まちをつくることは、一つ一つの開発や建築を自分でデザインして造ることだと思いかもしれませんが、そういうのではなく、さまざまなまちの仕組みをつくり、その仕組みを伴ってみんなが動いてゆくことでまちが変わっていく、そういう方法論です。

元町商店街の歩行者空間では、実は道路と民間の敷地に分かれる見えない境界線があります。みなさんが歩いているのは私有地だということもあります。このような場所が可能になるルールが埋め込まれ、ルールに基づいてまちがつくられています。

#### 都市デザインの草創期

都市デザイン室は、50年前にできたアーバンデザインチームから発展したものです。当時は行政の中の幅広い人たちに声を掛けながら進めてきましたが、そのような場所は当時ほとんどなかったのも、非常に貴重な存在であり、非常に大変だったと思います。そのようなことをしながら、さまざまな人たちをつないでいくには、相当の労力が必要です。まちをよくしたいという思いを持つ仲間を集めて、ムーブメ

ントにしていくことも非常に重要だと思います。

異なる事例として、ニューヨークのハイラインという高架鉄道の跡地では、たった2人の市民から活動が始まり、10年かけて多くの人を巻き込み、緑道が整備されていった事例があります。

### 都市デザインはカタチをつくることか？

都市デザインと聞くと、デザインする、つまり形を造ることだと思ふこともあってはいないでしょうか。これは、半分は正解で、半分は不正解だと思います。場所や形は、想いをみんなで共有するための触媒としてとても重要です。その分、関係する多くの人の思いを載せてその場所をつくらなければなりません。さまざまな議論をしながら、一つの場所をつくるということが非常に重要になります。

みなとみらいのスカイラインは、建物が海に向かって下がっています。海が大切だということが、言葉だけでなく、見るとすぐに分かるようになっていきます。何を大切にしているかが一目で分かるのは、意外に重要なことです。

象の鼻パーク、象の鼻テラスでは、さまざまな人がアートの活動などを行うための場所づくりが常に行われています。横浜らしいクリエイティブな取り組みです。

### 1980年代以降における都市デザインの拡張

1980年代は、歴史を生かしたまちづくりが盛んに進められました。当時、歴史を生かしたまちづくりという言葉があまり知られていない中、これが都市デザインだと明示したことは非常に立派だと思います。さらに、2000年代以降は、創造都市という活動を行っています。単にハードの歴史を残すだけではなく、その中でさまざまなクリエイターとも連携しながら、これを使う場所をつくりました。自分たちだけではなく、さまざまな人たちがここにに関わりながら活動をしていく場所も用意されています。

パリでは、15分圏都市構想というものがあります。現在のパリ市長は、全ての家から自転車等で、15分圏

内できちんと暮らすことができる都市をつくることを提唱しています。単に構想だけではなく、実践もしています。例えば、パリ市の中では、自動車の速度は、原則30キロ制限になっています。最近では、自動車空間を自転車の通行路にするコロナピストというネットワークづくりも行っています。この2年で、すぐに状況に応じたまちづくりが進んでいます。

### 都市デザインがもたらす横浜の未来

自分の豊かな場所やシビックプライドを考えようとすると、これまで何が行われてきたかも非常に重要です。歴史の中に自分たちへのヒントがあることもあります。

また、大きな視野と小さな行動、それをつないでいくものが都市デザインであるという話もしました。

さらに、一見関係ないように見えるものをうまく重ね合わせることで、新しい考え方が生まれるという考えも必要です。

今回のテーマでは、みなさんが今求めている豊かさとは何かということを考えることが重要だと思います。ただ、先が見えない時代なので、これだと決めるのは難しいかもしれません。まずは実験から始めてみて、チャレンジを重ねていくことが重要だと思います。

#### 都市デザインがもたらす横浜の未来

歴史-現在-未来の時間軸をもつ。  
(時間が経つと豊かになるまち)

大きな視野(ビジョン)と小さな行動(アクション)

視野を拡張して重ね合わせる  
(都市デザイン × ○○)

今、求められる豊かさとは何か？  
(くらし・いとなみ・ふるまい)

有限時代・不確定時代における「実験」都市  
(バックカスティング)

ポイント

- ・より良い豊かな場所の実現は、大きな視野(ビジョン)によるまち全体の魅力づくりと、それを個々の場面や場所に落とし込む小さな行動(アクション)の両方を並行して進める必要がある。そのつなぎ手が都市デザインである。
- ・都市デザインはまちの仕組みづくりで、仕組みに合わせて皆が動くことでまちが変わっていく。
- ・今求められる豊かさとは何かを考えながら、先が見えない時代の中で実験・チャレンジを積み重ねて実現に向かうアプローチが現在の都市デザインに重要である。

## 三輪 律江 氏

### 「暮らす」から見る横浜の未来

#### 都市デザインとケア領域へのアプローチ

都市デザインの未来を考えるとときに、外すことができないのは、ケアなどの領域へのアプローチです。建物を造るとそこに人が集まります。そこには、社会学の社会関係資本、ソーシャルキャピタルのような発想も必要になります。そこに関わってもらい、自分ごとにしてもらい、愛着を持ってもらうためには、それを使い込んで自らそこに入っていくというアクションが必要です。それが参画、参加というキーワードです。



#### 『暮らす』まちとしての横浜（課題と価値）

横浜は合併を繰り返してつくられてきたまちです。都心と郊外という区分に加えて、中間エリアが存在します。都心が急激に都市化すると、郊外エリアに広がり、都市化を経て更に郊外へ拡大、のサイクルを繰り返しています。

人口分布のメッシュ図を見ると、人口構造としては中心部が多く、郊外が中間で、白抜きの所は市街化調整区域だということが分かります。クローズアップして見ると、濃いメッシュの横に薄いメッシュが隣接するところがあり、横浜のまだら模様の人口構造が顕著に表れています。また色の濃い所は計画団地である場合、高齢の方や母子世帯など、特定の世代が集住していることの表れとも捉えられます。

この顕著なまだら模様の人口構造は、隣同志の町内会で起こっている問題が全く違い、それがまちづくりを行う難しさになっていることを示します。

横浜の北部と南部では、ニュータウン開発のような住宅地開発の方法論が異なります。中間部のエリアは小さく切り崩して宅地開発を行います。郊外で時間が遅くなればなるほど、ほぼ一斉に開発が始まっていきます。北部は比較的計画的ですが、南部はまとまっていますが民間開発団地が主になります。

これが、エリアで集中的な高齢化が面的に進んでいく原因になります。

このような高齢化や人口が偏るという話は、そのまちがどのように次のステージに進んでいくかを考える契機のひとつになります。目を伏せるわけにはいきません。

都市デザインは、都心部の形としてかっこいいものをつくるだけではなく、戦略的にデザイン思考をどのように盛り込めばよいか、どのように再構築できるかということを考えることでもあり、今回のみなさんの議論すべきテーマのひとつだと思っています。

#### 都市に暮らす人のライフステージと生活圏

未就学児の生活圏に関する調査研究をする中で、乳幼児生活圏の話があります。

総務省の調査では、コミュニティの最小単位は中学校区（1km 四方程度）という表現をしています。もっと小さい単位として、小学校区（500m 四方程度）がありますが、私の感覚だとそれでも大きい。

私の調査では、さらに小さい単位を乳幼児生活圏（300m 四方程度）と呼び、街区単位で、顔が見える関係のような捉え方をしています。

乳幼児生活圏を主な生活圏と捉えるライフステージは、人生の中で3回あります。自分が小さいとき、自分の子どもが小さいとき、自分がシニアになったときです。生活圏は年齢や生活によって縮んだり広がったりしますが、そのときに同じ時空間をシェアする世代を、まちに在する世代として捉えることができます。そのような小さな範囲からどのように広げていくかということを考えたいと思っています。

#### 「まち保育」の提唱と 視点導入：

##### 子どもの育ちを軸にしたまちづくりへ

それが、子どもの育ちを軸にしたまちづくり、「まち保育」という考え方に繋がります。

公園や道はパブリックな場所ですが、セミパブリックな場面もあります。それを豊かにしていくことによって、まちで育てることが行われ、かつ、まちそのものが成熟していくというプロセスが生まれるということが、実践を通して分かってきました。そのためには、都市や建築のしつらえ（ハード）だけでなく、ソフトの導入も必要です。



例えば、子育て施設は専門的な場所のように思われますが、その人たちはまちづくりの担い手にもなり得ます。その方々をいかにまちづくりの現場に巻き込むかが、私たちの使命だと思っています。

### 郊外既存住宅地での実践：金沢シーサイドタウン

六大事業の一つ、埋め立て地にある金沢シーサイドタウンは、職住近接を実現するため住宅だけではなく、産業団地もセットで開発されましたが、職住近接はそううまく進みませんでした。ただ共働きが普通になった現代社会において、図らずも男性ではなく、女性の働き方による職住近接が再構築されています。そして、金沢シーサイドタウンを選択して住んでもらうために、企業も巻き込みながら一般社団法人を立ち上げて公民連携の事業を進めています。

5つの重点プロジェクトの推進拠点として、空き店舗を活用した「並木ラボ」という場所を運営しています。並木ラボのキッズコーナーを拠点として、子育て世帯に向けてプログラム、居場所づくりを行いたいという要望が地元から出るようになりました。

さらに、場をつくって待っているだけではなく、せっかくなので外に出て、URの広場など、いろいろな場所を使って転々とアウトリーチもしています。私たちだけが行くのではなく、社協や民生委員などのケアの専門家にも声を掛けて、一緒に集ってもらい、その人とつながってもらうようにしています。

そのうちに、横浜市子ども青少年局の「親と子のつどいの広場事業」に応募することになり、準備に当たって仲間になる人を探しました。関わっている若い子育て当事者の人たちは、2年ほどのサイクルでライフステージが変わっていくため、次のサイクルの人に入ってもらう必要があります。保育士や養護支援の経験者等30代、40代の方が10人ほど集まりました。このような形で、並木ラボのキッズコーナーをつどいの広場としてリニューアルしました。

ケアの世界では、ケアが必要かどうかよく分からないという、認識のない人にも働きかけることが非常に重要です。そのためには、非常にゆるい関わり方、ゆるい場の提供が重要です。ゆるい場の提供を実践しながら、その意味をきちんと伝えていこうと考えています。

#### ポイント

- ・子どもからシニアまで、多層な暮らしの「圏」の存在を落とし込む都市デザインが必要。
- ・建物を造り人が集まったとき、そこに関わってもらう、自分ごとにしてもらうためには、人々が自らそこに入って行くというアクションが必要。それが参画、参加というキーワードである。
- ・子どもの育ちを軸にしたまちづくり、「まち保育」という考え方がある。公園や道という公共空間の端など、専門性が弱い「ゆるい場」が専門性の弱い一般市民によるケアの場になると、まち全体で子育てが行われ、かつ、まちそのものが成熟していく。

社会関係資本のネットワークの人たちや、見守るシニアも、近くで全く関係のないことをしていますが、そこにいる子育ての人たちと顔見知りになることができます。そのようなことがしやすい場の設定や設計を意識しています。

### 『暮らす』から見る横浜の未来

人の生活に目線を向けると、いろいろな立場で圏域に違いがあることが分かります。シニアの方と働き盛りの方とでは、生活圏がかなり異なります。それをどのように落とし込むかは重要な話です。

本日は、ケアの話を中心にしました。都市デザインという視点では、ハードや建築、都市だけでなく、福祉や教育などの別の領域との協働を考えていかなければならないと思います。これに関心を持って関わってもらいたいという市民像をつくっていかねばなりません。そのためには、課題や価値づくりについて当事者意識を持って入ってもらい、主体的に関わりたいと思わせることができれば良いと思っています。

そのためには、ゆるい場が必要です。それは、道の上や公共空間の隅っこ、公園、広場です。多目的で専門性としては弱い場所ですが、そのような場所で専門家ではない一般市民がケアにうまく絡んでいくと、強いまちになると思っています。その意味では、場というもののつくり込みは重要だと思っていますし、主体性の醸成を培うためには、参加というデザインが必要だと思っています。

#### 『暮らす』から見る横浜の未来

##### 私の考えるキーワード:

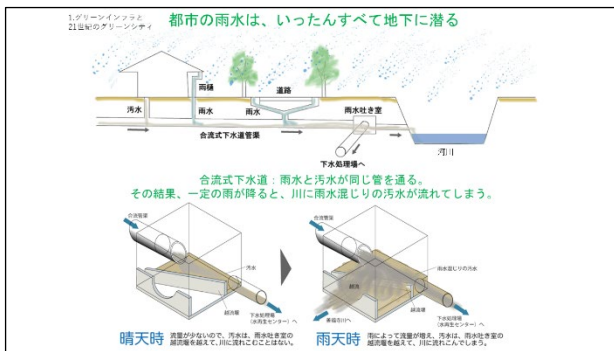
- ・多層な暮らしの「圏」の存在
- ・連携・協働の相手像(同分野・異分野)
- ・当事者意識と主体性の醸成
- ・専門性の弱い「場」×専門性の弱い「人」
- ・「場」の重要性と参加デザイン

## 都市のレジリエンスを高める環境と社会のデザイン

### 気候変動による災害の激甚化、都市型災害の増加

気候変動で災害が激しくなり、高頻度化しています。都市は急に河川に水が集まりやすい構造を持っています。出水のピークの流量の増加が速くなっていて、危険な状態が続いています。

都市の雨水は、一旦全て地下に潜っていて、合流式下水道の場合は、汚水と雨水が一緒の管を通っています。通常はそのまま下水処理場に送られていきますが、一定以上の雨が降ると、下水道の管がいっぱいになってしまい、下水道から川に流れてしまうのです。



### 川の治水から流域の治水へ

一方で、インフラの維持コストは今後増加していくと言われています。こうした状況を踏まえて、国交省が2020年に政策を大転換しました。流域治水というものです。

これまでは河川管理者が河川のハード面で対策していたことを、これからは流域全体で、市民や民間すべての関係者で対策するものです。河川区域外での治水を促すため、インフラの多機能化や活動へのインセンティブを設けて展開していくことが重要です。

### 自然が持つ機能を使う、グリーンインフラ

ここで、グリーンインフラが手段として出てきます。自然の機能をインフラ的に使うものです。ビルの屋上庭園や公園が雨水の貯留機能を備える事例、遊水池を湿地のようにして様々な生き物の生息を促す事例などがあります。一方で自然環境はすごく不確実なので、いろいろな人が参加して、地域と関わっていくことが求められています。

現在はニューヨークやポートランド、ロンドン、コペンハーゲンなど、世界のさまざまな都市でグリーンインフラによる気候変動対策や、それをフックに

した都市の再編が行われています。

グリーンの効果として、気持ちの良い環境の整備により市民が歩きたくなる街になることで、市民の健康増進といった効果も期待できます。こうしたまちづくりの実現を促す仕組みづくりも同時に考えていかなければならないと思います。

### 横浜市の緑と水

横浜には、緑の10大拠点というものがあります。緑地がうまく郊外にネットワークしていて、これは大きな郊外の資産だと思います。

そこから水源として川がいくつか流れています。横浜市の中には、比較的大きな流域がまとまって流れており、水源から河口まで存在しています。

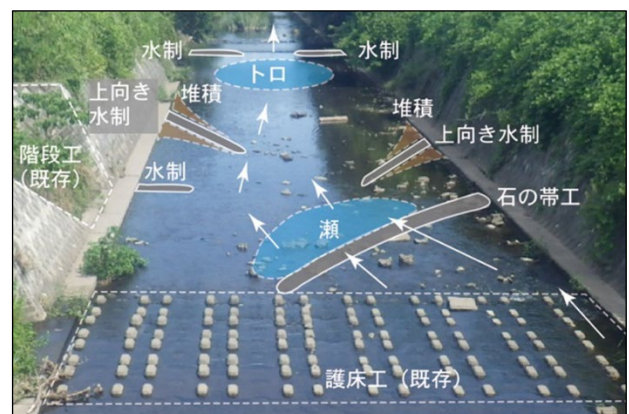
管理者の視点から見ると、それぞれの川によって国・県・横浜市が管理している部分、地元の人たちがローカルに取り組んでいる部分が複雑に組み合わせられています。市民主体の活動については、様々な公園愛護会、森林愛護会、水辺の愛護会が各々の保全活動や、協働で緑を豊かにする活動を行っています。

こうした活動が流域治水、ひいては気候変動の適応にもなるよう、どうレベルアップ、シフトするのかということも考える必要があると思います。

### 帷子川中流：はまっこアユ遡上プロジェクト

帷子川は、延長17kmで、下流部は県管理で、上流部は横浜市管理になっています。

中流で「はまっこアユ遡上プロジェクト」に取り組んでいます。河川企画課のプロジェクトで、アユが遡上している川をうまく使って、自然再生を河道内で実践するものです。





何も変化がない堀込河道を、石組みの水制を作って組み合わせることによって、川の中に複雑な流れを作って、土が堆積する。そこにアユが上ってきた時に、葦や水草が生えていて、いろいろな生き物を餌に食べられるという環境を計画しました。

もともと、河道がツルツルで、水草が生える場所がなく、生き物にとって貧困な川だったので、少しでも水生植物や砂が溜まる場所を作るという当初の目的は達成できたと思います。

行政主導から、自立的に動いていく市民組織に生まれ変わることができたことも、このプロジェクトの大きな成果だったと思います。

### 白根地区：市民協働型グリーンインフラ計画

帷子川の支流で、中堀川という二級河川があります。上流部は水路のプロムナードになっていて、ここでグリーンインフラの市民協働プランニングをやりました。

白根公園の方はゆったりと水が流れていますが、実は地下にバイパスで流下しています。地下のバイパスのトンネルが下流で合流する場所は洪水が発生しており、住民の方は怖いと感じているという課題がありました。

住民の関心が高かったのが、白根神社の境内の中にある滝で、塩ビパイプから水がわずかに流れている状態です。この地域にとって大事な聖地だった歴史もあり、水量を再生したい思いがありました。

それに対して、グリーンインフラビジョンを考えました。滝の流量を増やすために、上流域の方で雨水を浸透貯留するというシンプルなプランです。上流にある学校で屋上庭園や雨水タンク、校庭でビオトープを作ったり、谷戸の森で林試を管理して、水が浸透しやすい取組を行うことで地下水を涵養し、滝の水が増えると良い。水が増えると、湧水生態系で生きるホタルやホトケドジョウが生息できるようになる。こちらの公園にも浸透性能を高めていくことによって、滝の流水も増やすプランを提案して、住民の方に受け入れられました。

#### ポイント

- ・気候変動で災害が激しくなり、高頻度化している。都市は急激に河川に水が集まりやすい構造である。国交省は河川区域外の公園や農地、森林などの自然を治水機能の1つとする、グリーンインフラという考え方の普及を図っている。
- ・横浜には「緑の10大拠点」があり、緑地がうまく郊外にネットワークしている。森林や河川の環境保全に関する市民活動も盛んである。こうした活動が流域治水、ひいては気候変動の適応に向けた動きにどうレベルアップ、シフトしていくのか考える必要がある。
- ・上・中・下流域での各活動と、流域全体の計画との一貫性のデザインが重要である。

この活動を契機に、流域の住民の方々が自分の家で雨水タンクやレインガーデンを設けてみよう、そうした行動変容につながる可能性を考えています。流域全体の活動と、川の活動を同時につなげて実践していくことが重要だと思っています。



### 多様な主体の参加による流域全体の治水

流域全体で治水を考えた時に、上流・中流・下流が連携していく必要があるのではないかと考えています。更に、ここに市民や民間の視点を入れることが、流域治水を実現するためのグリーンインフラやレジリエンスのデザインとして重要と思います。

例えば、上流域は樹林や里山を保全することで雨水を貯留浸透することができます。

中流から下流域は、学校や公園、道路、谷戸などで雨水を貯留浸透したり雨水を利用することで、洪水の可能性を減らすことが考えられます。

河口は内部河川、親水空間の造成や、埋立地の遊休地の活用案を検討することができます。水際に干潟や藻場を作ることも考えられます。

上流域・中流域・下流域で、皆様それぞれのステージ、例えば学校や公園、農地、自分の家、里山などで活動を行うことが、結果的に下流の洪水リスクを減らしたり、もっと楽しい横浜都心部の再生につながるのではないのでしょうか。

## 社会課題と企業と公共

### 横浜のチャンス

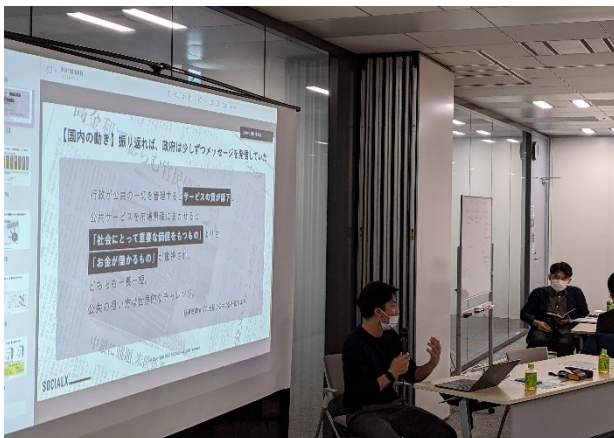
10年間横浜で議員をしており、離れてもう丸5年が経ちます。幾つか企業を経て、今の会社をしています。全国を飛び回っているものですから、住まいは横浜ですけれども、昔に比べると客観的に横浜を見られる状態になっていると思います。

横浜市は、新型コロナの流行を機に、大きなチャンスを掴んでいる自治体だと思います。コロナになって、東京に行かなくてもいいことが増えました。オンラインでできることはオンラインですするという文化はもう根付いてきました。東京が強かった理由は、シンプルに働く場所に近いということだけ。横浜は自然も豊かで、都市の独自性もある。東京にも近いこのポジショニングを、どうつくっていくのかは非常に大切だと考えています。離れてみて、横浜のチャンス、ポテンシャルがとても感じられる状況になっていると思います。

### 自治体と民間企業をつなぐ

ソーシャル・エクスという会社で、「逆プロポ」という大企業向けに新規事業開発を支援するサービスを提供しています。その新規事業開発に自治体が入ってくるという、珍しいスキームを提供している会社です。

いろいろな官民共創のサービスも提供していますが、日々自治体の首長、職員、特に官民共創の現場の方々が来て、雑談から対話の場が生まれています。仕事ベース、契約ベースではなく、まず対話から始める、お互いを知るといような活動を行っています。



### 経営環境の世界的な変化

少し前と今では、公民連携が大きく変わり始めています。最も大きいのは、経営環境が非常に大きく変

わっていることです。

2018年、世界最大の投資会社がフィンク・レターの中で株主至上主義を脱却しようというメッセージを出しました。

2019年には、パーパス声明という、「会社は儲かればいいだけではなく、社会に対して果たすべき役割があり、その存在意義をきちんと打ち出さないと、これからの経営は成り立たない」、という声明を示しています。

国内の動きでいうと、政府の骨太の方針の中で、「新しい資本主義」というコンセプトが出されています。

2018年に経済産業省が出した『21世紀の公共の設計図』という白書でも、「行政が公共の一切を管理すると、サービスがどうしても下がってしまう、しかし完全に民間に任せると、お金の儲かることしかないので、大事なものがそぎ落とされてしまう。このバランスを取っていかねばいけないということ」がうたわれています。

この1年前に、総務省でも、「自治体が公共サービスをフルスペックで提供する時代は終わった」と示しています。

デジタル庁では『デジタル重点計画』を出しており、「準公共分野」というコンセプトを初めて示しています。防災、教育、インフラなどの8分野は、官と民で連携してサービスをつくっていくことが明確にうたわれています。デジタルの分野でも、デジタル庁を所管する総務省、そして経済を所管する経済産業省、この2省1庁がこのような方向に動き始めています。

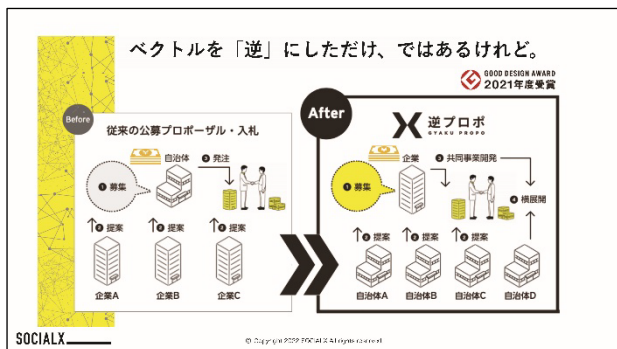
### 「逆プロポ」というサービス

「企業はお金を出してでも社会課題を知りたい」。これが、うちの会社が成り立っている最大の仮説であり、もう間違いがないと思っています。この仮説を知ったから、逆プロポというサービスを思い付きました。

名前のとおり、逆プロポとは、公募型プロポーザルのベクトルを逆にしています。公募プロポは、行政が社会課題を用意して、予算を用意して、これを実装する部分を民間企業のアイデアでお願いするものです。逆プロポの発想は、企業がお金を出してでも社会課題を知りたいのであれば、企業が募集すればいいというものです。企業のほうが興味ある社会課



題を提示して、お金も用意して、良い政策アプローチを持っている自治体を募集して、マッチングするのが、私たちが提供しているサービスです。



官民共創は、仕組みだけ真似すればうまくいくものではありません。この仕組みを使いたい企業に私たちがいつも言っているのは、サービスを売りたいだけの企業はお断りということです。企業はいつも自分たちのサービスを売りたいがっているけれど、本当にしたいことは何か、解決したい社会課題は何か、それは一体誰のどのようなことを解決できているのか。これを聞くと、企業側の頭の中が少しずつ変わって行って、事業を通じて自分たちが本当にしたいことは何かに切り替わっていきます。

自治体側に言っているのは、本当の課題は何かです。市民といいます、その市民は一体高齢者なのか、子育て世代なのか、子どもなのか、現役世代だとしても、そこは働いている人か、共働きか。市民の解像度を上げようという話をしています。これをしていくと、逆プロポでマッチングしたときに、プロジェクトがうまくいきます。

通信事業者の事例を紹介します。結果的にマッチングした枚方市からは、子ども食堂の現場が非常にアナログという悩みがあったため、要件定義をして、サービスをつくり、実証実験をしました。枚方市とこの会社が出会ってから、実証実験が完了するまでに、サービスの開発も含めてたったの5カ月しかかかっていません。しかも自治体の予算は0円です。この動きを見ていた他の企業から、もっと面的に広げたいという要望があり、さらに企業2社が組んでプロジェクトをつくろうとしています。うまくいけば、自治体の予算はかけずに、九州一円の子ども食堂の食材の配布を民間だけの力で回すことができそ

うです。これも、やはりソーシャルインパクトがあるからこそ、仲間づくりができたと思っています。

## 民間企業と自治体の関係性

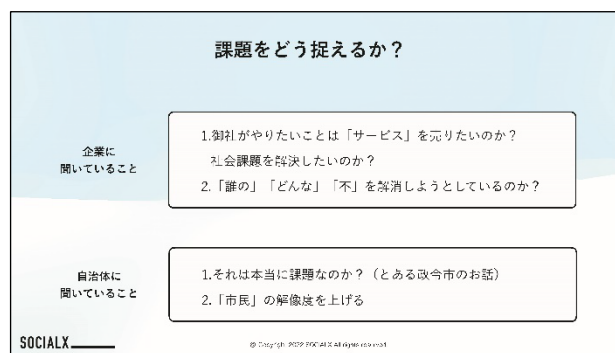
企業と自治体の関係性の中で、受発注、契約の関係をなくすだけで、両者の関係が驚くほどクリエイティブになります。

私たちが企業の方、自治体の方に申し上げているのは、出会いが大事ではなく、出会い方が大事ということです。同じリソースとゴールイメージを持っている企業と自治体でも、出会いが悪いと、プロジェクトがうまくいかない。この辺のデザインをどうしていくかが、非常に重要だと思います。

逆にここがうまくいくと、自治体が自前でやり切れない部分は、民間と協力しながら実現していくことができるような社会に変わってきていると思います。

これからの50年先の横浜の都市、街を考えると、テクノロジーは、多分私たちが想像しないところまで便利になっているはず。手段は何でもある、だからこそ大事なのは、どうありたいのか、そこに対する現状とのギャップがどれくらいあるのか、そしてそのギャップが埋まったときに、どのような人がどのようにハッピーになるのか、この解像度を高くすることです。

コロナを機に、横浜はとても良い立ち位置、良いポジションの都市になっている、チャンスをつかんでいく都市になるのではないかと考えています。



### ポイント

- ・時代とともに公共サービスに対する考えが変わり、国や地方自治体が民間企業のノウハウを求めようになり、民間企業も社会課題への関わりが経営に不可欠という認識となった。
- ・官民共創を成功させるために「逆プロポ」で自治体側が重視すべきことは、課題の本質を認識すること。「市民」と表すとき、その市民は高齢者を指すのか、子育て世帯なのか。「課題解決の結果、誰がどのように幸せになるか」の解像度を上げることで、官民共創の成否が変わる。

## 羽藤 英二 氏（都市デザイン室 光田室長との対談）

### 都市はこれからどこへ行くのか？

#### 都市デザインの役割

（参加者のグループ発表と光田室長のプレゼンを終えて）

##### 羽藤

過去の横浜市の都市デザインや都市デザイン室の限界、これをしたいということはありませんか。

##### 光田

最近、都市デザインはそもそも都市づくりではないか、都市計画と都市デザインとは何が違うのかを議論しています。都市計画は、機能や用途地域などを計画的に配置しますが、本当に都市として機能していくためには、もう一手間かけなければならない、その土地をどのようにしたら生きたものにできるかが、都市デザインの役割なのかもしれません。

今までは、都市計画行政と都市デザイン行政がうまく連携できていないので、これからは、それぞれでできることを出し合いながら進めていくことが大事ではないかと思っています。

#### 横浜市のアイデンティティ

##### 羽藤

今日の発表を聞いていると、みなさんの未来論は、主体として自分たちがどうするかという視点になっていました。

前半の統計データを見ると、未来の横浜市は人口が激減し、大きく変わると感じます。住んでいるところやネイバーフッドの概念が、今とは違うものになり、まちづくりの中心や生活時間の中心が変わると思います。

『視点① 近隣に根差した新しい都市生活』について、まさにこれをデザインしなくてはならないと感じました。大学では職住別のライフスタイル前提の都市を教えています、明らかに「近隣に根差した新しい都市生活」とは違います。私たちはまだそのデザインを生み出せていません。

『視点② 本物のローカルアイデンティティ』は難しいと感じます。「横浜都民」といわれたりして、一つのアイデンティティがないという感じもします。光田さん自身は、アイデンティティをつくっていきたい、そのような求心力が横浜市には必要だろうと考えているのですか。

##### 光田

横浜市のアイデンティティとして、みなとみらいの夜景やランドマークタワーからのスカイライ

ンをイメージしている人が多いと思います。横浜市に限らず、本来のその土地の良さやアイデンティティがあるのに、それが前面に出ていないことがもったいないと思います。一方で、自分の中で分かっている良さを教えたくないという思いもあります。そういうものを発信できたり、共有できたりすると、街に対する関わり方や接点の持ち方も変わってくるのかと思っています。

##### 羽藤

教えたくないという気持ちはあるかもしれませんが、アイデンティティは一枚岩ではなく、いろいろなところに所属しています。そのアイデンティティを突き詰めて考えていくことが、ローカルアイデンティティという視点には必要なのではないかと思いました。



#### 市民参加は誰のものか

##### 羽藤

『視点③ 新しい市民参加』は、言葉としては分かりますが、テクノロジーを使うことなどですか。

##### 光田

現在はネット社会になり、いろいろな活動が SNS などを通じて行われています。どこでも、誰でも、何時でも、やりとりができることが良さです。そういう意味で、地縁に基づいた市民参加ではなく、新しい市民参加を考える必要があると思っています。

##### 羽藤

大学の学生に「メタバースで都市は変わるのか」という課題を出したときに、変わるという反応と変わらないという反応がありました。メタバースは体が不自由な人も市民参加ができるようになるから良いという意見と、それでは本当のバリアーがなくならないという意見がありました。新し

い市民参加の機会が広がる時に、楽しいこと・面白いことを根本にすべきではありませんが、もっと多様な人にコミットメントするべきとも思います。AI が進化した時に人間に残されたワークは何かと考えると、自分の持っている既得権を手放して他人のために差し出すことができるか、使命感を与えられるかどうか重要かもしれません。

## リニアで失うもの、得られるもの

### 羽藤

『視点④ 活動に合わせた都市更新』について、海側と山側でインフラのスケールや関心の持たれ方は異なります。横浜市が行っている事業に市民参加を組み合わせることは、一番できそうなことだと思いました。デザインの方法やまちづくりの方法をみなさん自身が提案し、人を巻き込んで進めていく活動を、都市更新に掛け合わせることができると、すごくいい横浜になりそうです。先日、リニアモーターカーに試乗しました。甲府盆地が非常に綺麗に見えますが、ここも東京が獲得するのかなと思いました。リニアモーターカーは、時間や距離を短縮して、東京を拡大していく構想ですが、逆に言うと、横浜は横浜として違う立場を希求できる可能性があると感じました。

## これからの都市デザインの着地点

### 光田

メンターの野原先生と三輪先生にも、これまで未来会議に並走していただきました。羽藤先生からのお話を踏まえて、新しく見えたもの、種になりそうなものはありますか。

### 野原

今日の発表で、みなさん一人ひとりがこれほど街にどのようにアクションできるかを考えていて、市民参加のあり方が変わったと感じました。この不確定な現代には、自分のところに落として小さくしたものから、もう一度、紡いでいくよう考えなければならないと思います。一方で、どのように紡ぐかという「紡ぎ方」は不足している気がします。横浜の未来をみんなでどのように紡いで、何をすればそれができるのかを考えていくことが大事と感じました。

### ポイント

- ・「近隣に根差した新しい都市生活」に最適化された都市デザインを生み出す必要がある。
- ・ローカルアイデンティティの視点には、その土地が持つ独自のアイデンティティを突き詰めることが必要である。横浜にリニアモーターカーが通らないことは、東京の影響下から逃れる機会とも考えられる。横浜のアイデンティティを生かした都市デザインを希求できる可能性がある。
- ・横浜には「人間が生きていくための環境を良くしていく」都市デザインが求められており、実現したときに街や人の価値観、ひいては東京まで変える可能性がある。

### 三輪

私は自分の専門が建築や住環境計画、子育てやケアであり、都市デザインの土俵にはいません。今回は、その上で都市デザインに何を期待したいかを考えて参加しています。

都市計画や都市づくりには、ケアというキーワードがありません。都市づくりと、都市計画と都市デザインの違いなど、私も分からないところがあります。人の営み、暮らし、ケア、遊び、人の成長時と、実際の街の時間軸をどのように組み合わせるかは、大都市横浜と郊外では、全然違います。今後どのように整理するのか、それは都市デザイン室への宿題だと感じました。

## ウェルビーイングと都市デザイン

### 羽藤

人間が生きていくための環境を横浜が良くしていくことが大事で、それができてきたときに街や人の価値観、横浜、東京もが変わると思います。そのようなデザインが、今、目指すべきウェルビーイングではないかと感じています。

### 光田

現在、山中市長が『子育てしたくなる街』を掲げて取組を行っていますが、出産費用の支援や保育園の数だけではなく、横浜なら生きる力を育めると感じて移住してくる人が増えることも、目指すべきことだと感じました。

### 三輪

横浜市の 18 区の合計特殊出生率はばらつきがあり、街のインフラとの関係について調査をしたところ、公園や緑地の面積と関係がありました。その街で子育てしたいかは、引っ越してきてすぐはわかりません。街のインフラや都市デザインは、子育てしたくなるかどうかと近いところに存在していて、意外にローカルデザインのキーワードになるのではないかと思います。

### 光田

たくさん宿題をいただいて、次の未来会議や次年度に向けて考えていかなければいけないと感じています。



## これからのコミュニティデザインとウェルビーイング

### コミュニティマネジメントとは

コミュニティマネジメントというテーマで研究をしています。建物の建て替えや経済をうまく回すという、従来のそのような意味での地域活性化ではなく、人と人、人と地域のつながり方が変わる、あるいは社会関係資本が増えていく、それで街や暮らしを良くしていこうというものです。

人と人とのつながりがあればあるほど、協調的にうまくいく、防災・健康・教育などにとってさまざまな利点があることは、一般常識になってきました。しかし、どのようにすれば実現できるのかという方法論はまだ薄い状況で、私はその部分を研究しています。

私が考えるコミュニティマネジメントとは、一人一人の良い状態、つまりウェルビーイングをつかっていくマネジメントと、個人が良くなるだけではなく、社会的・地域的にこれまでよりも良い状態になっていくイノベーションの両方が必要だと思っています。この両方を実現するためには、コミュニティをどのようにつくるのかということが重要です。人のウェルビーイングを実現しつつ、地域にイノベーションを促していくようなコミュニティを見つけていくことが必要になります。

自分の地域で何かの活動をするのは、やってみなければ、どのようになるのか分かりません。これまでのまちづくりは、市民活動も個人では限界があるので、団体で行うことが定石でした。しかし、最近は少し違っていると思いませんか。元気な街は、一つの団体が頑張っているというよりも、絶えず新しいキャラクターが出てきて、街の中でもさまざまなつながりができて、外からファンができるように、絶えず出入りがある状態から街の新しい活動が起こっています。市民団体だけが支援しているのではなく、よりパーソナルな活動が増えています。SNS の普及で、パーソナルネットワークの中からさまざまな活動が出てくることは無視できない状態です。

### ウェルビーイングと街づくりの関係性

目指すべきまちづくりをもう少し社会的な意味合いを含めて表すと、持続可能な社会と、一人一人が、心が満たされて、自分らしく生き生きと暮らせる社会の両立を、トップダウンではなく、住民主導のボトムアップによるイノベーションによってどのように実現できるかがポイントになると思います。

最近、ウェルビーイングという言葉をよく聞くようになったと思います。ウェルビーイングの一般的定義は、良くある、健康、あるいは満ち足りた存在や生き方、人間の心身の良い状態ということです。人類は、医学であれば病氣、都市工学では交通問題、社会学では犯罪といった、悪い面をどのように解消していくかという研究はしてきましたが、いい状態をどのように実現するかの研究は後回しにしてきました。「幸せ」は個人的で短期的な幸福感ですが、それよりも、もう少し広い、いい状態のことを「ウェルビーイング」と言っています。



一人一人が感じるウェルビーイングは違います。それを前提に、色々な人に聞いていくと、これまでの研究には当てはまらないものが見えてきました。また、西欧やアジアでは文化の違いによる価値観の違いもあります。

私たちはその中で、自分を中心にした同心円状に、自分とつながり、他者とつながり、社会とつながり、世界とつながることが、良く生きる上で重要だと考えています。今日のテーマに近づけて考えると、地域への参加は、その人の人生の質を高めるのではないのでしょうか。地域で自分のやりたいことができる、実現できる、それまでできなかったことが可能になるかもしれません。他の人とのいい関係ができる、家族でも職場の仲間でもない知り合いができる、社会にいいことができる、地域に出るとその地域の自然や歴史にも触れやすいなど、まちづくりに参加することは、自分のウェルビーイングを高めていく近道なのではないかと考えています。

さらに、自分がいま楽しいという幸福を、未来や他の人との関わりにもまで広げていき、社会や環境の持続可能性につながる概念としてウェルビーイングを進化させていくことにより、社会を良くしていくことが個人のウェルビーイングの実現にもつながって

いう都市デザインが見えてくるのではないだろうか。

### 【世田谷区尾山台】おやまちプロジェクト

人のウェルビーイングを高めていくような街やサービスをつくるためには、専門家同士や生活者だけの対話ではなく、さまざまな人が一緒に考えていくことが必要です。

私たちは、JST/RISTEXの研究で、ウェルビーイングデザインのツール開発、ワークショップやマニュアル作成、出版、企業のコンサルティングを行ってきました。

そうした成果を、実際の暮らしをアップデートしていくための仕組みとして、ウェルビーイングをテーマに街のいろいろな人たちと一緒に新しい価値観の暮らしをつくっていくリビングラボを運営しています。尾山台商店街に面した2階建の建物で、2階がリビングラボ、1階がコミュニティカフェになっています。



住んでいるけれども暮らしていない人たち、住所はそこにあるけれども家の周りにつながりがない人たちがすれ違い続けていることが、東京の住宅街にはたくさんあります。路上へのテントの設置や、バーの営業といった「創造的な誤作動（エラー）」を起こすことで、日常のルーティンや効率的な暮らしから外れた場となり、多様な人との出会いを生み、様々なことが始まりました。関わる人々の広がりを調べると、大学や関心がある層はつながりを通じて集ま

#### ポイント

- ・豊かなコミュニティ形成には、個人の良い状態（ウェルビーイング）の実現と、社会的・地域的に良い状態になっていくイノベーションの両方を市民主導で実現することが必要である。
- ・日常の空間に「創造的な誤作動（エラー）」を起こすことで、多様な人々との出会いを創出し、個人では成しえない、各々の個性や資源を生かした新たな活動の創出につながる。
- ・全国の個々のコミュニティの活動は小さくても、同じコンセプトを持つ多くの活動がネットワーク化されていくと、次の社会へのイノベーションの源になる。

ってきますが、地域の一般の人や子ども、子育て層は、オープンな場を開くことによってつながっていくことが分かってきました。

まちづくり活動は、新しい参加者が頭打ちになることがあります。バーや路上で何かをしていると、興味関心を持つ人の裾野が広がってきました。それが「おやまちプロジェクト」の大きなエネルギーになっています。

「おやまちプロジェクト」は、異分野の発起人4人が一緒に始めたことで、本来は非常に遠かったはずの人たちが、ネットワークするきっかけになりました。そうすると、構造的な壁が生まれ、それぞれがつながった瞬間にイノベーションが起こっていることがわかりました。

ここから先は予想外でしたが、近所の病院やクリニック、企業、小中学校、団体、必ずしも個人として参加することがない人たちが、「おやまちプロジェクト」に入ってくるようになりました。

地域に根差していろいろな人と関わっていくうちに、まちの課題解決には活動自体だけでなく、社会のいろいろな課題を皆で解決する「現場」が重要なのではないかという考えに変わっていききました。

だとすれば、様々な問題や課題を持ち込みやすい研究室のような存在が、街の中にあれば良いと考え『おやまちウェルビーイング・リビングラボ』をつくりました。コロナ禍のため、ラボを使いながらつくっていき、1年後に完成したときには既にいい感じのコミュニティが生まれてきました。

### 小さな活動が起こすイノベーション

ウェルビーイングな暮らしを自分たちの手でつくっていくというコンセプトを共有している人たちの活動がネットワーク化されていくと、一つ一つは小さい活動でも、次の社会につながるイノベーションが起こっていきます。私たちのリビングラボの小さいプロジェクト、あるいはみなさんがこれから構想していくプロジェクトは、現在は都市全体を変えるものではないかもしれませんが、小さいものがたくさん起こっていくことが、やがて次の社会をつくっていくと考えています。



# 3

## 皆で描くこれからの都市デザイン

### テーマ1：都市デザイン横浜の継承と革新〈定義班〉

#### ■グループワークの帰着

#### これまでの都市デザインの継承と革新

- ・これまでの理念「個性と魅力ある人間中心のまちをつくる」は、特にハードの側面で継承していく。
- ・その上で「人間中心」という言葉をヒューマニティから「パーソナリティ」と捉えなおし、「自分中心」：個々の営みを大切にしつつ、「中庸」の概念でお互いを認め合うことを大切にする。
- ・さらにサイバー空間も含めて、場と場、人と人、人と場のあいだをデザインしていく。



#### PLURIVERSE CITY

- ・これまでの「東京 or 横浜」「都心 or 郊外」「ハード or ソフト」といった二元論的な価値観ではなく、多様な選択と組み合わせを重視した多元的な価値観を実現する街、一人ひとりが自由に暮らしを「選択」できる環境を支える都市を「Pluri (複数の)」「verse (世界)」City と表した。

#### アイデア創発

#### ▼PLAY CITY≒カスタマイズ・アワー・シティ

- ・子どもの時に近所で遊んでいたような感覚で、活動しやすい街、使える街になれば、自分たちの街だと思える。自分たちの街を自分たちの場として、カスタマイズできると良いのでは。DIY 出来る公共空間。
- ・知識や情報へのアクセシビリティが担保されていることで、どこでもだれでもなりたいたい自分になれることが大事。

#### ▼なぜ横浜？

- ・横浜は都会も緑もあり、今後の横浜にはチャンスというが本当？中途半端かも知れない？！
- ・都心でも郊外でも「横浜」というのではなく、すべてのエリアがそのエリアを誇りに思えるようになって欲しい。その期待と衰退危機の両方の意味で「郊外がなくなる」という言葉を使った。
- ・サイバー空間が発展した未来でリアルな空間、横浜という都市はどのような意味があるのか。サイバー空間も受け入れられるような懐の広さがある欲しい。デジタルの時代だからこそ、リアルな場、空間での主観（自分ごと）も大事になる。

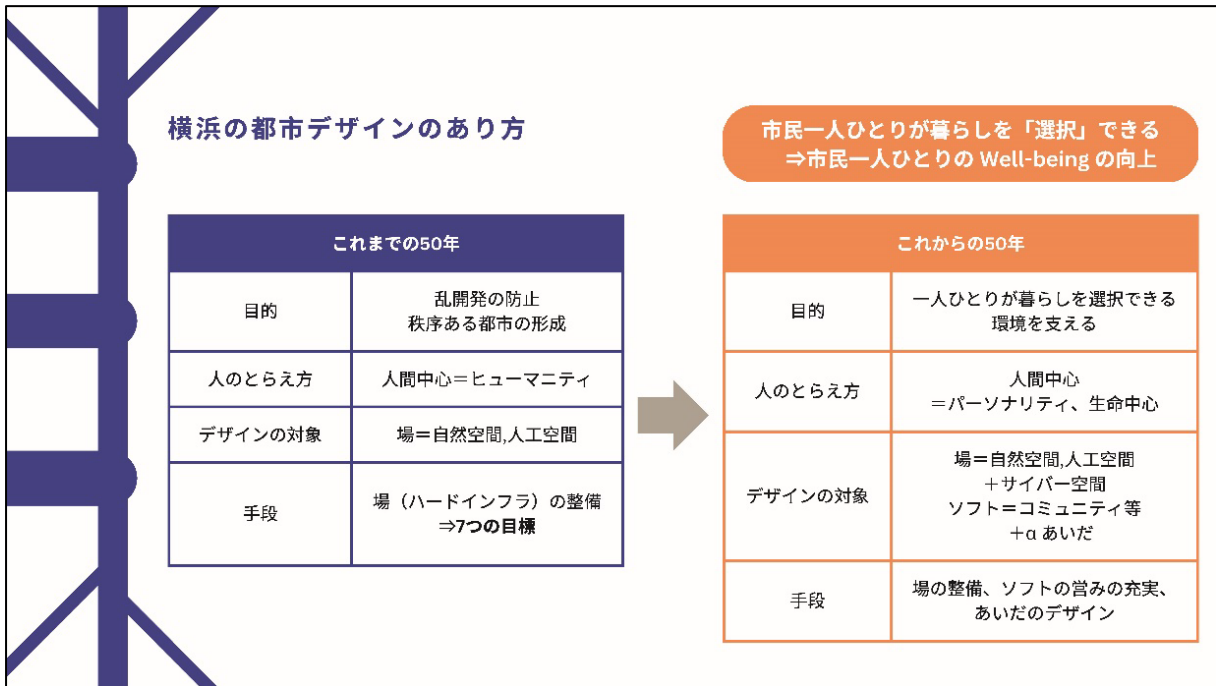
#### ▼PLURIVERSE の具体化に向けて

- ・自分たちが自分たちの未来や生活、を選ぶことができるということ自体、非常に充足している、ということが前提となっていると思う。日常を何とかやり過ごしている人たちにとって、参加できる、とか多元的である、ということは救いにならない可能性がある。
- ・ダイバーシティやケアの概念が都市デザインには足りていない。この分野で都市デザインは機能できるのか？



## ■グループワーク プロジェクト提案

<テーマ> Pluriverse City Yokohama



## Pluriverse City YOKOHAMA

ハード  
つくる

### 個性と魅力ある人間中心のまちをつくる

<都市デザインの7つの目標（擁護すべき価値）>

- 1 歩行者活動を擁護し、安全で快適な歩行者空間を確保する
- 2 地域の地形や植生などの自然的特徴を大切にす
- 3 地域の歴史的、文化的資産を大切にす
- 4 オープンスペースや緑を豊かにす
- 5 海、川などの水辺空間を大切にす
- 6 人と人がふれあえる場、コミュニケーションの場を増やす
- 7 形體的、視覚的美しさを求める

8 自然環境を大事にする

9 場とコミュニケーション、過去と未来などの隙間を繋ぐ

ソフト  
営む

### 「私のStory」が織り重なるまちにする

< 擁護すべき価値 >

- 1 自分が自分中心を認め、大切にし、育てる
- 2 自分で営みを選び、遊ぶように人生を豊かにする
- 3 人、地域、営みの個性を認め合い、大切にし、育てる
- 4 中庸な営みを選ぶ
- 5 コミュニティの自立した営み、コミュニティ同士の共創する営みを増やす

サイバー  
繋ぐ

### リアルとサイバー、自由に空間を行き来するまちにする

< 擁護すべき価値 >

- 1 サイバー空間とリアル空間がシームレスに繋がることを楽しみ、空間を豊かにする
- 2 ソフトの「擁護すべき価値」を同じく擁護する。

< keyword >

自分中心、人間中心 / 中庸、余地・余白、寛容 / 地域ごとのアイデンティティ、個性、脱ベッタウン・郊外住宅地 / パーソナリティ、人生をデザイン、カスタマイズ、利己的・利他的、安定した労働、遊び、好きなエリアの選択 / 半径500mのまちづくり、小エリア（圏） / Pluriverse、DAO、マルチチャタイプ / AI

## ■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ>いいね！から、私がデザインするまちづくり

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える

未来会議

みらいかいぎ

**Name:** テーマ1\_小倉有美子

未来会議を通じて行きついた「都市デザイン横浜の継承と革新」  
私が、実践すること、大事にする価値

---

## いいね！から、私がデザインするまちづくり

これからの都市の有り様に大事な要素(ビジョン)は、  
**私(個人)と社会全体の幸福が一致する場(ピック)、活動、繋がりをデザインすること**

デザインは、私がするもの。なぜなら、私しか私の幸福はわからないから。  
私が、「私と社会全体」の幸福に繋がる**デザイン(選択)**をする。  
今、置かれている環境や状況とは、関係しない。なぜなら、これからの、日々の行動の、**選択**だから。

この**選択**の数が増えるほど、**幸福な私(個人)**とコミュニティ・社会が広がっていく。

「継承・革新」が必要なのは**幸福**になりたいから。それには、今は、変化が必要  
**「いいね！一緒にやろう！こうしたらできるね！応援するよ！」**  
私の起こす変化は、小さくて大丈夫なのだけれど…ムズカシイ？  
その上、**私と社会全体の幸福が一致する選択**が必要…ムズカシイ？

## 三忽三行

三忽(怒らない、怖れない、悲しまない) 三行(正直、親切、愉快)

私が、**三忽三行**を実践しつつ、行動を**選択**をすれば、**私も相手も幸福**。そして**社会全体が幸福**になる。

<テーマ>つながりを紡ぎ、わたしのよこはまへ

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える

未来会議

みらいかいぎ

**Name:** 藤巻りほ      **Group:** 1

つながりをつなぎ、わたしのよこはまへ

⇒ “はじめの一步”を踏み出したくなるために

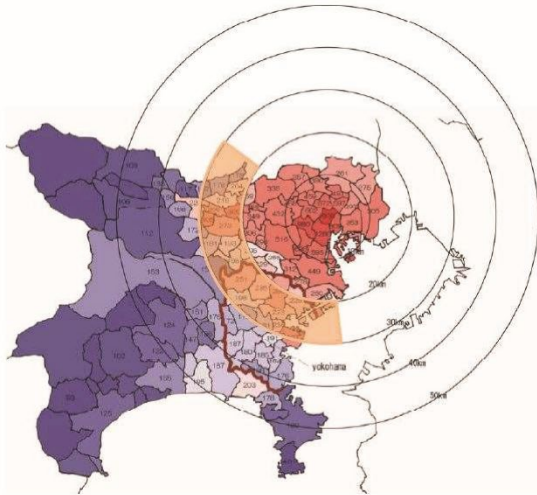
- 一人ひとり：となりの人、次の世代へ**温かさ**
- 自分：歩きたくなる街路、シームレスな地域交通 ext.

↳ **つながりを助けるのインフラ整備**

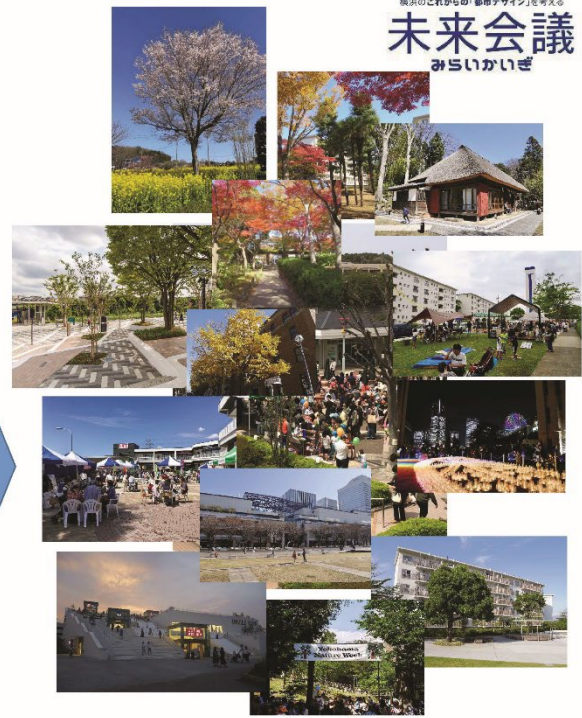
Name: 大嶽 洋一

Group: 1

# 「郊外」のなくなる日 -SUB-ALL-URBAN-



「都心からの距離」と地価で一律に押し量られてきた、「郊外住宅地」としての横浜から…



18区それぞれの地域のまちの魅力を生かした、プルリバース（多元的）な都市・横浜へ  
小さな移動で、いくつもの自分を見つけられる



## テーマ2：都心部の可能性〈都心班〉

### ■ワーキングの帰着

#### カスタマイズ・バーガー・シティとは

- ・都心部に集まる人々がそれぞれ暮らし（具）を選んで重ねている様子をハンバーガーに見立て、それぞれの暮らしを束ねる役割としてのピックが街中に必要という議論を展開した。
- ・生活のシーンが交わる公園や水辺空間といった場所が、ハンバーガーを貫くピックの役割を果たしている。更にモビリティやSNSなどの情報がピックとピックをつなぎネットワーク化することが重要である。
- ・都心部にあつまる人々が自分の好みの具材とピックを選んで、充実した生活を実現するイメージを表している。

#### カスタマイズ・バーガー・シティで実現する暮らし

- ・「水上交通が充実し、カーフリーな都心部」  
郊外と都心部をつなぐ水上交通網を更なる充実や、都心エリア内の自家用車に代わる新たな交通手段の導入を目指す。
- ・「グランドレベルに活気がある都心部」  
公共空間の自由な活用を実現し、居酒屋やカフェが日常的に営業できるような場所を増やす。
- ・「既成概念にとらわれない都心部の生活とコミュニティ」  
法規制の緩和や細やかで弾力的な土地利用誘導等による都心部の形成を目指す。
- ・これらは30年～50年後の理想像である。この理想像の実現のためにしておきたい10年後の目標も整理した。



#### アイデア 創発

#### ▼ハンバーガーシティの「ピック」が指すもの

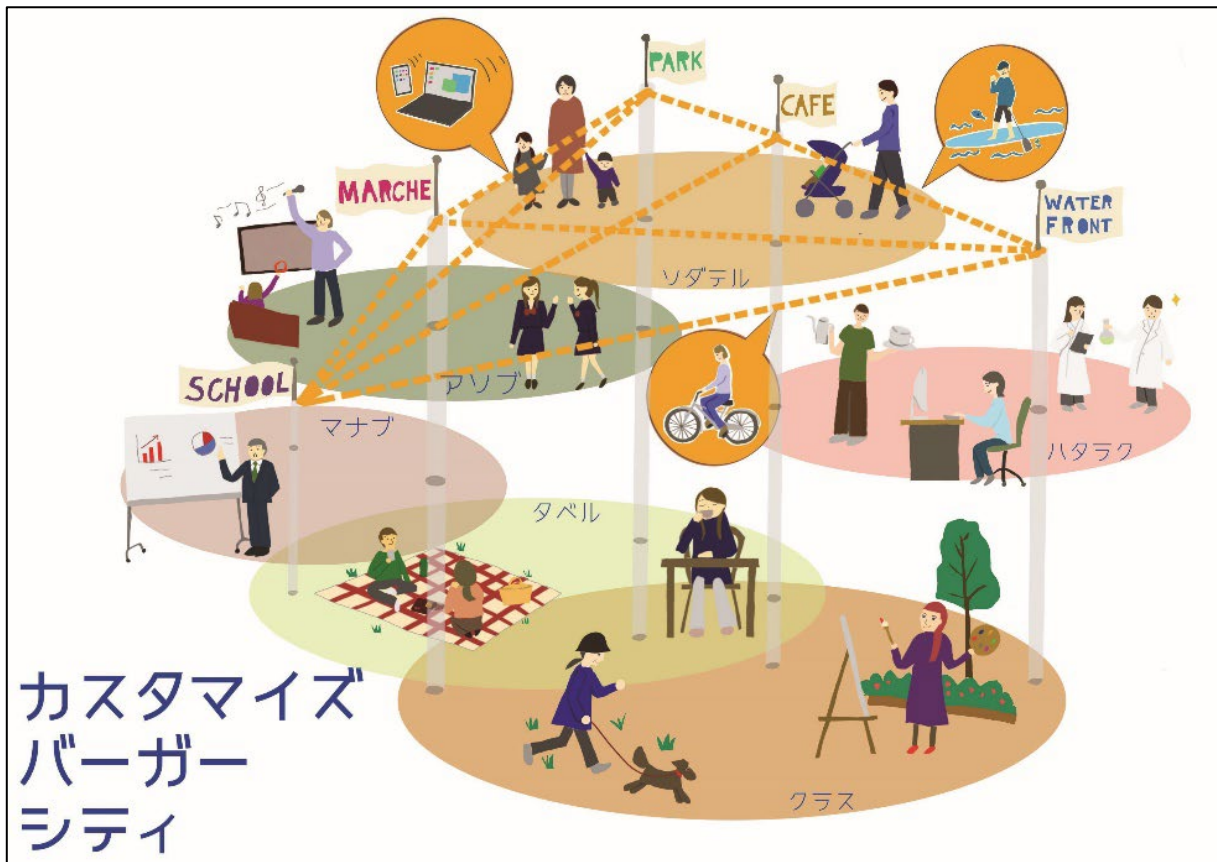
- ・将来的に、デジタル社会の到来や郊外部のまちづくりの進展により、「果たして都心は必要なのか？」という議論も生じるのではないかと。その時、「都心に来なくては体験できないもの」を用意していく必要があり、それには水辺や歴史などの都心の資源と人々の暮らしを結び付け、また人の暮らしどうしも結びつけることができる仕掛けが重要なのではないかと。
- ・他の暮らしとのつながりが持てる場のことではないかと。多くの人を惹きつけるウォーターフロントがそれになり得ると考える。
- ・多くの人が集まる都心では、多くの「暮らし」が存在する。それらがピックでつながり、ピックとピックどうしもつながっていくことで更なる魅力増進を図る。

#### ▼ピックの具体例

- ・シアターやレストランなど、人々が集まる場を設ける。
- ・市民が街づくりについて話し合い、気軽に参加できる場を設ける。
- ・周辺に所在する企業や公共施設の情報を提供するショールームを点在させ他の情報を得られやすい仕掛けを用意する。

## ■グループワーク プロジェクト提案

<テーマ>カスタマイズ・バーガー・シティ



### 2 都心班〈実現したい暮らし〉 カスタマイズ・バーガーシティ・ヨコハマ

都心部には、多種多様な人が集まり、それぞれのライフスタイル、暮らしのシーン(場、場面)があります。これが、バーガーの多彩な具材です。それぞれの人が共有する場(水辺、公共空間、低層部、職住接近、コミュニティなど)がピックです。ピックで申刺しにすることによって、シーンが重なっていきます。さらに、ピック同志をつなぐものが、多様なモビリティや情報ツール、コミュニティなどで、それを支えるインフラ(例えば5G、DXなど)の普及も重要な要素です。「カスタマイズ・バーガーシティ・ヨコハマ」は、ここに集まる人々の行動がレイヤーとして重なり合い、ピックにより共有され、それゆえに他にはない、都心部ならではの濃厚かつ充実感の高い暮らしを実現します。



カスタマイズ・バーガーシティ・ヨコハマにはどんな人がいる？

働く人、売る人、暮らす人、散歩する人、研究する人、教える人、育てる人、学ぶ人、食べる人、創造する人、遊ぶ人、くつろぐ人、越境する人…多様。

ピックをどう増やし、どうつなぐ？

#### ①水上交通が充実しカーフリーな都心部

- ・都市部への自家用車の侵入禁止(移動は、自転車・公共交通機関のみ)
- ・自動運転の自家用車による移動(エリア内)
- ・都心部の2車線以上の道路には、自転車レーンが存在している
- ・都心部から郊外部への水上公共交通の充実
- ・活気と賑わいのある水際線
- ・誰もが川に降りられ、上られる都心部
- ・水上レストラン、シアター、アートを都心部の水辺に配置
- ・横浜駅東口を水上交通の結節点へ



#### ②グランドレベルに活気がある都心部

- ・屋台・カフェを営業できる場所が増え、日常的に、人々が歩道やオープンスペースでくつろげるような街へ。
- ・歩いても、立ち止まっても、座っても楽しい、路上空間が都市部に街区ごとに存在している。そこで、人々は、ランチを食べたり、お茶をしたり、仕事も出来るようになっている風景が日常となっている。



#### ③既存概念にとらわれない、都心部の生活とコミュニティ 日本をけん引する都市「ヨコハマ」

- ・市民は、横浜視点でなく世界的視野を持ち、地方や海外とも繋がるコミュニティを形成している。そして、その中心に横浜都心部のコミュニティが存在している。
- ・エリアとエリアがつながり、暮らしと暮らしがつながることによってイノベーションが起こり続けている。
- ・用途地域が緩和されたことで、都心部でも新鮮な食材が採れるようになっている。
- ・都心部に暮らし、働く。そして、地物の食材もてにはいる都心部になっている。
- ・デジタル技術を活用した先進的な総合図書館が横浜に誕生し、知の拠点となっている。
- ・横浜での職住近接を求め、多くの企業が横浜都心部へ進出している。
- ・横浜で生まれた技術を世界中の企業が求めてくるようになり、アジアの中核都市として日本を引っ張る都市となっている。



	現在	10年後	30-50年後(都心部でしかできない事をやる！！)	
水辺	<ul style="list-style-type: none"> <li>水上交通が乏しい</li> <li>水辺に降りれない/上がれない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>棧橋設置の規制緩和</li> <li>がんき(雁木)の復活</li> <li>横浜駅周辺の水辺解放(県の管理から市の管理へ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>都心部から郊外部への水上公共交通が充実</li> <li>活気と賑わいのある水際線</li> <li>誰もが川に降りられ、上がれる都心部</li> <li>横浜駅東口を水上交通の結節点へ</li> <li>水上レストラン、シアター、アートを都心部の水辺に配置する</li> <li>横浜回帰→高速道路を川に戻す</li> <li>都市部への自家用車の乗り入れは原則禁止(移動は、自転車・公共交通機関のみ)</li> <li>自家用車は自動運転なら都心部へ進入可能(都心部以外は運転も可能)</li> <li>無人バス以外のバスは無くなっている</li> <li>都心部の2車線以上の道路には、自転車レーンが存在している</li> </ul>	<p><b>世界一、水上交通・施設が充実する都心部</b></p>
モビリティ	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポテンシャルはあるが、公共交通網が、十分に活用されていない</li> <li>路面電車が走っていた時代の方が都心部は便利だった？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>シェアサイクルの拡充</li> <li>無人バスの運用を積極的に進める</li> <li>車道を徐々に減らして、歩行者と自転車に開放していく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>無人バス以外のバスは無くなっている</li> <li>都心部の2車線以上の道路には、自転車レーンが存在している</li> </ul>	<p><b>カーフリーな都心部</b></p>
土地 & 空間	<ul style="list-style-type: none"> <li>公共空間は、他都市よりは積極的に活用されている事例はあるが、充分ではない</li> <li>公開されていない公開空地が多数ある</li> <li>歩行者のために開かれていない(車中心)</li> <li>路面店が少ない、散見されている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>公開されていない公開空地への罰則</li> <li>ビルの立替、リノベ時にグランドレベルを開放する事で、税制優遇や規制緩和(特に罰則)</li> <li>腰かけて話せる場所をふやす</li> <li>路上専用の緩和検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>屋台・カフェを営業できる場所や開かれた沿道産物が増え、日常的に、人々が歩道やオープンスペースでくつろげるような街へ</li> <li>歩いて、立ち止まっても、座っても楽しい、路上空間が都市部に街区ごとが存在している</li> <li>そこで、人々は、ランチを食べたり、お茶をしたり、または仕事も出来るようになっている</li> <li>風景が日常となっている</li> </ul>	<p><b>グランドレベルに活気がある都心部</b></p>
生活 & 社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>まちづくりに関わる人や企業は増えている</li> <li>エリア内での連携は増えつつある</li> <li>横の繋がりが作りを作る場所が少ない(サロンのない?)</li> <li>みなとみらいに生活感が加わると面白くなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>用途地域を緩和し、都心部の土地をいろいろな使い方ができるようになる</li> <li>関係人口がさらに増え、また、エリアを超えた連携が増える</li> <li>街の中にサロンのような場所ができ、人々が情報や意見交換ができるように</li> <li>デジタルの力(5Gの普及など)で、市民生活がさらに便利になっている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民は、横浜視点でなく世界的視野を持ち、地方や海外とも繋がるコミュニティを形成している。そして、その中心に横浜都心部のコミュニティが存在している</li> <li>用途地域が緩和されたことで、都心部でも新鮮な食材が採れる様になっている</li> <li>都心部に暮らし、働く。そして、地物の食材も手に入る都心部になっている</li> </ul>	<p><b>既成概念にとらわれない、都心部の生活とコミュニティ</b></p>
ビジネス & 国際	<ul style="list-style-type: none"> <li>横浜に本社を持つ企業は東京に負けるが、R&amp;Dの拠点が集積しつつある</li> <li>国際的知名度はまだ低い(横浜といえばタイヤ?位の認識)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>デジタルの力(5Gの普及など)で、市民生活がさらに便利になっている</li> <li>みなとみらいや都心部職性近接家賃割引制度(会社側にも補助金・家賃補助など)</li> <li>いろいろなジャンルの企業の研究が連携し、技術革新が横浜で生まれる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>デジタル技術を活用した先進的な総合図書館が横浜に誕生し、知の拠点となっている</li> <li>横浜での職性近接を求め、多くの企業が横浜都心部へ進出している</li> <li>横浜で生まれた技術を世界中の企業が求めてくるようになり、アジアの中核都市として、日本を引っ張る都市となっている</li> </ul>	<p><b>日本をけん引する都市「ヨコハマ」</b></p>
歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外に向けて発信できる歴史的資産はあるが、強く打ち出せていない</li> <li>開港の歴史資産という、日本国内に数少ない魅力が横浜にはある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>三溪園や鶴名寺、總持寺等の日本文化を感じられる観光資源への交通アクセスを強化していく</li> <li>開港の歴史を活かした観光を強化していく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>三溪園等へ、BRT・水陸両用バスの導入や地下鉄延伸などアクセス向上によりインバウンドが大幅増を実現</li> <li>馬車/SLの復活</li> <li>市電復刻</li> <li>明治・大正期の建築物の集積・復元</li> </ul>	<p>都心部の港湾施設跡地等を、街ごと開港歴史博物館化し活用(開港記念日の村立)</p>

## ■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ>人と人が交差する横浜のまち

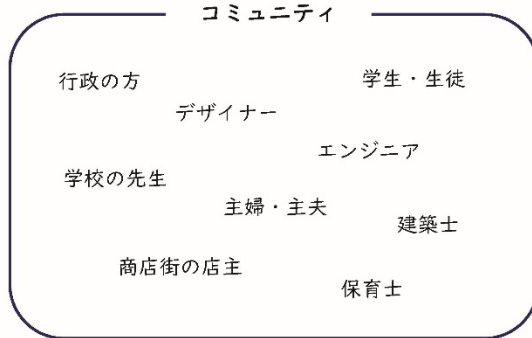
### 人と人が交差する横浜のまち

未来会議 Name Endoh Takaya Group2：都心部の可能性

中区エリアを中心としたコミュニティの活性化を目指す。市民、行政、企業などのあらゆるバックグラウンドを持った人々がまちをもっと楽しくできる仕組みを考える。そこで、分野ごとに興味を持った人が集まることができるコミュニティを構築する。自由に話し合うことができる環境を目標にしている。



徐々にエリアの拡大を目指す。



※上記に書いた職種の方は一部となる。

これからは“特定の人”がまちづくりに携わるのではなく、その場に関わっているみんなが参画できる場所作り、まちづくりを目指していきたい。また、コミュニティの枠を超えた“繋がり”を大切にしていってほしいと考える。そして、次の世代に引き継ぐべき横浜のアイデアをまとめていく。

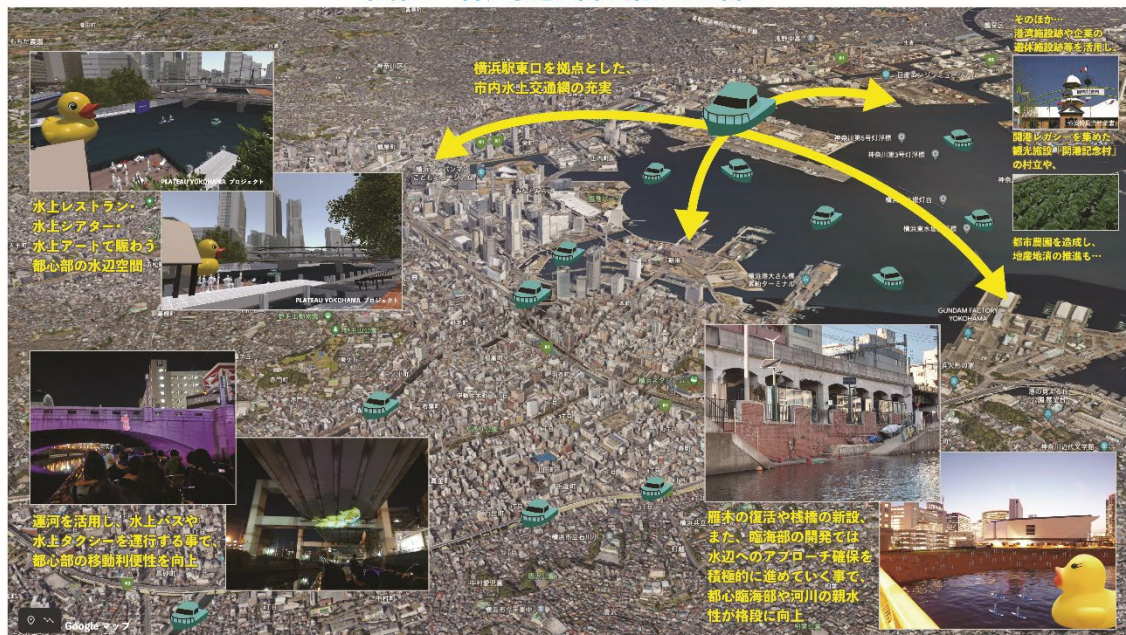
<テーマ>水辺維新都市 横浜(再)開港 ～世界で一番、水辺空間を楽しめる街へ～

Name : Ta\_HISA Group : 4

### 水辺維新都市 横浜(再)開港

～世界で一番、水辺空間を楽しめる街へ～

未来会議  
みらいかいぎ



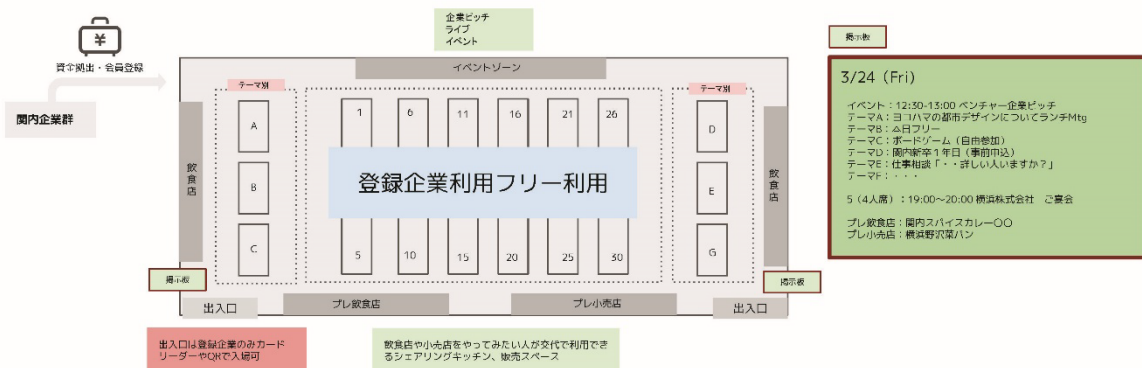
水上交通や水上施設が充実した、2050年代の横浜都心部では、水辺空間に沢山の人が行き交い、その賑わいの中で、新しい繋がりやビジネスが育まれている。



<テーマ> 関内企業横断型食堂 “KANNAIBRIDGE”

高山亮太 2\_都心部の可能性\_都心班

関内企業横断型食堂 “KANNAIBRIDGE”



3/24 (Fri)  
 イベント：12:30~13:00 パンチャー企業ビッチ  
 テーマA：ヨコハマの都市デザインについてランチMtg  
 テーマB：ムジフリー  
 テーマC：ボードゲーム（自由参加）  
 テーマD：関内散歩1年目（事前申込）  
 テーマE：仕事相談「・・・詳しい人いますか？」  
 テーマF：・・・  
 5（4人席）：19:00~20:00 横浜株式会社 忘年会  
 プレ飲食店：関内スパイスカレー〇〇  
 プレ小売店：横浜野次郎パン

関内の企業群より出資や会員を募り、企業横断型食堂スペースを設ける。（旧市庁舎街区など）関内には企業は多いが物理的に集まる場所がないため、サロンのような位置付けで当たり前前に食事に行き人が自然に集まる場を確保。登録企業の従業員や家族のみ利用でき、イベントゾーンでは企業ビッチや講演などが随時開催され、聞きに行くというより食事のついでに気軽に参加できる形に。テーマ別のゾーンを設け、掲示板でどのテーブルで何をやっているかを把握でき、自由に参加するような仕組みも導入。またプレ飲食店や小売店も設け、実験的に店舗を運営することも可能に。大学のサークルのたまり場のような関内企業が共通で利用できるフードコートやカフェスペースのイメージ。分野、相談、部署、趣味などに一定のスペースを決め、お昼や休憩時間に溜まり場のように情報交換できる。  
 出入口は登録企業のみカードリーダーやQRで入認可  
 飲食店や小売店をやりたい人が交代で利用できるシェアリングキッチン、売売スペース  
 関内の企業群より出資や会員を募り、企業横断型食堂スペースを設ける。（旧市庁舎街区など）関内には企業は多いが物理的に集まる場所がないため、サロンのような位置付けで当たり前前に食事に行き人が自然に集まる場を確保。登録企業の従業員や家族のみ利用でき、イベントゾーンでは企業ビッチや講演などが随時開催され、聞きに行くというより食事のついでに気軽に参加できる形に。テーマ別のゾーンを設け、掲示板でどのテーブルで何をやっているかを把握でき、自由に参加するような仕組みも導入。またプレ飲食店や小売店も設け、実験的に店舗を運営することも可能に。大学のサークルのたまり場のような関内企業が共通で利用できるフードコートやカフェスペースのイメージ。分野、相談、部署、趣味などに一定のスペースを決め、お昼や休憩時間に溜まり場のように情報交換できる。  
 コミュニケーションのピックとして活用し、企業を超えた横の繋がり強化。意見交換やアイデアの構想を促し、連携しPoCなどで社会課題や地域課題を解決を促す。

<テーマ> 車道は余白だ、みんなで作る、都市デザイン

萩原史織 Group 2

車道は余白だ、みんなで作る、都市デザイン



家から一歩も出なくても、生活が成り立ってしまうような時代。住む場所を選ぶ時、家の外に出るなら、人と触れ合うなら、出会うなら、ワクワクが沢山ある横浜だよね、という時代を。横浜の中心地は、人と人との化学反応が生まれる、濃い都市コミュニティへと生まれ変わる。

関内周辺エリアの、四角い土地を活かし、各街区の交差点となるところを、車両侵入禁止にして、『余白』を作る。その『余白』の使い方は周辺住民次第。広場にしても、農園にしても、プールにしても、コワーキングスペースにしても、アトリエにしても、何でもよし。ただし、みんなが使える場所にするのだけがルール。面白い『余白』活用をしている場所に惹かれて引っ越してもよし。そうしてリアルな場づくり、交流から、市民たちが誇りを持って、自分達の手でこれからの横浜の都市をデザインしていく時代に。

Name : MIKAMI

Group : 2 都心部の可能性

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
未来会議  
みらいかいぎ

## 人や企業をつなげる “ショーケース”



### 最近って...

- オンラインのコミュニケーションやサービスが充実  
→ まちには“リアルだからこそ体験できること”が求められている
- インターネットは個人の興味・関心に沿って情報を提示  
→ “人”や“場所”は、まったく知らない分野との偶然の出会いを期待されている
- 企業・団体のほか、SNS等を通して個人も情報発信が可能  
→ 発信の主体も内容も多種多様

### 都心部の特徴

- ヒトとモノが集まる場所  
→ 化学反応が起きて、新しい商品やサービス、価値観が生まれてきた
- 大辺空間や開港以来の文化・歴史、景観など、これまで育ててきた資源が豊富  
→ 訴求力の高いコンテンツを生かして魅力づくりが可能
- “知られざる”魅力、“実はおもしろい”人が眠っている  
→ 隠れた宝を表に出せば、まちを訪れる人に新たな気づきや刺激を与えられる



→ 誰もが発信源となり、自らの興味関心や事業、活動を横浜の魅力として伝え、人や企業をつなげていく場所「ショーケース」をまちに増やしていく

### ショーケースで何を？どんな効果がある？

#### ◎企業の「ショーケース」

そのまち

- 商品やサービスの市場調査
- オンライン販売の期間限定店舗
- 専業パートナーの募集 等

効果

- 他社の社員との交流が生まれ、新たな事業の創出につながる
- 福利厚生共有、サークル活動などにつながる

#### ◎個人の「ショーケース」

やがて

- ハンドメイドのスイーツを販売
- 趣味で撮影した写真を展示
- 卒論のリサーチ
- おすすめの本を持ち寄る 等

効果

- 自分を表現できる
- リアクションが励みや刺激になる
- 様々な人に向けて発信できる

→ 新たな気づきやチャンス、チャレンジの機会ができる！  
業に変化するまちに触れられるため、訪れるたびに刺激が得られるまちに！

### どんなスペース？

#### ◎常設・仮設



YADOKARI HAWK



北陸アーキテクチャープラス  
まちなかテント

### どんなスキーム？

#### ◎既存の取組みを生かす



LOCAL BOOK STORE  
kita



さくらみらい  
マルシェ

#### ◎新たに設ける

- 企業が自らの敷地に設ける
- ほこみちの古用者が設ける
- FJ内会館をショーケースにする

### どこでやるの？

#### ◎空地や公共空間を活用



大学キャンパス 既存ビルの一角



公園 道端

## テーマ3：海をひらく〈海班〉

### ■グループワークの帰着

#### わたしとみんなの海のまち～横浜～

- ・この海といつまでも暮らしていくために、人も生きものも、安心して住み続けられる街づくり。
- ・眺める水辺から、いつでも触れられる心地よい水辺がある都市へ。将来にわたって横浜に住む人それぞれが、それぞれの海を体感できることが、横浜の価値になる。

#### これからの開発に必要なこと

- ・横浜は港と工業の街として発展してきたが、近年は物流拠点としての国際競争力が低下している。海や港に集積する多様な人・資源を活かし、新たな国際都市の在り方を考える必要がある。
- ・世界的な課題として、気候変動による海面上昇、海洋汚染や乱開発などへの対策が必要である。
- ・横浜では特に、人口減少や産業構造の転換による臨海部のスポンジ状の土地利用転換が起こりつつあり、今後の海のあり方を考える余地がありそう。

#### 「横浜らしさ」の価値をアップデートする

- ・こうした背景を踏まえ、今後の取組には「環境共生」「静かに過ごす」「エネルギー」「健康・医療」「防災」という5つの視点を加える必要がある。
- ・また、企業、行政、市民が一体となって横浜の海が持つ強みや課題、先述の価値観を共有し官民共創を実現することが重要である。
- ・このためのきっかけとして、臨海部の工業地や駅周辺等の既存の都市空間に水辺との触れ合いの場を設け、新たな価値観を差し込むことを目指す。



#### アイデア 創発

#### ▼海との関わり方

- ・370万人の市民が海を自分事として捉えられることを目指すには、海が色々な人のやりたいことを受け入れられるプラットフォームになっていくと良いのでは。
- ・ソフト、ハード問わず海との関わりを可視化するきっかけ、仕掛けを作る取組も必要。
- ・横浜の海はみなとみらいだけでなく、本当に多様な個性を持っている。その多様性を上手く生かしていけると良い。
- ・「海に出られる」という感覚がハードルを下げることに繋がる。水上交通はその点でとても大きなポテンシャルを持っている。



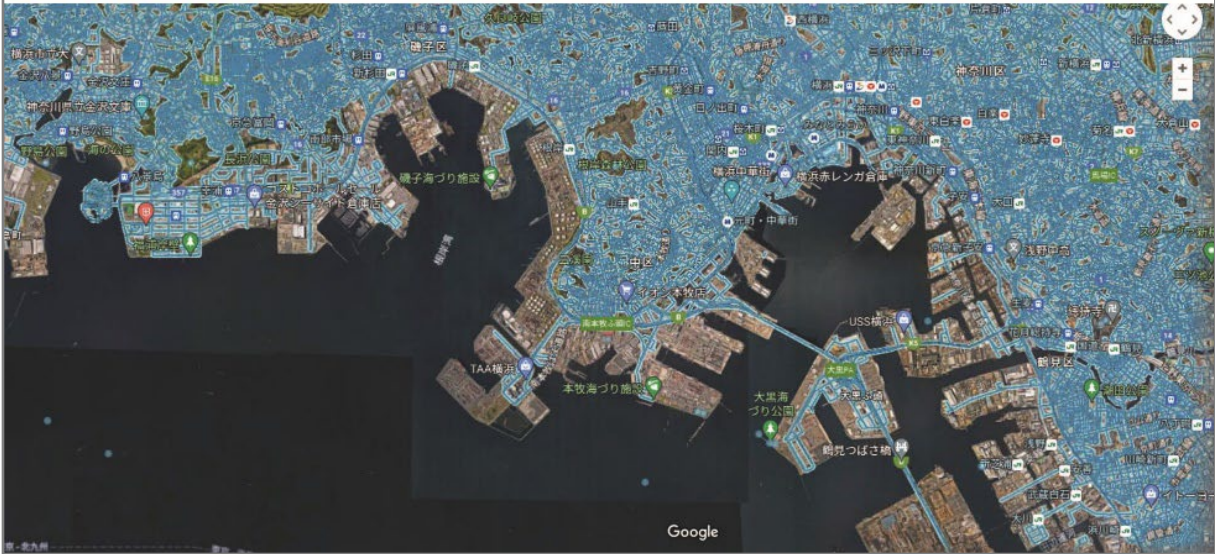
## ■グループワーク プロジェクト提案

<テーマ>わたしとみんなの海のまち～横浜～

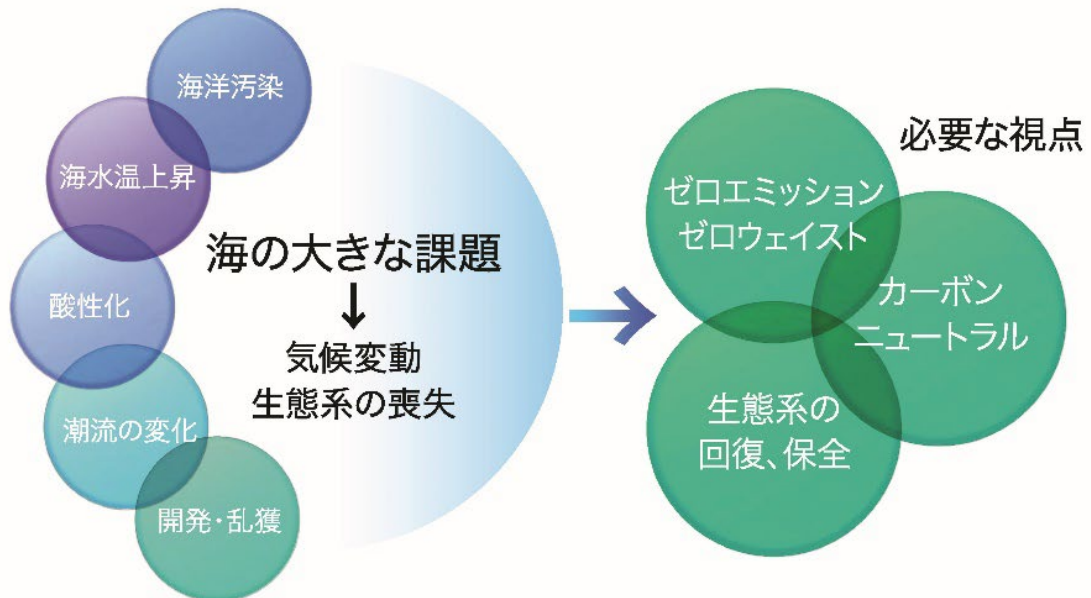
ほとんどの海岸線が埋立地である横浜  
現在一般に立ち入りができ、海に触れられる場所はごく一部

GoogleMapより ストリートビュー可能エリアを表示

地図データ©2023 Google



わたしたちが直面する海の大きな課題と  
これからの開発に必要な視点



5つのキーワードを軸に  
「横浜らしさ」の価値をアップデートする

地図データ©2023 Google





## ■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ> 横浜の水辺をつなぐ地域の足をつくろう！

**Name :** 永松大樹 **Group :** 3\_海をひらく

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える

# 未来会議

みらいかいぎ

## 横浜の水辺をつなぐ地域の足をつくろう！

“横浜の海”をもっと便利にもっと身近に

「海の駅」は、誰でも、気軽に、安心して、楽しめる施設、横浜には4か所が整備されている陸から海から、どちらからでもアプローチできるマリナーレジャー拠点となっている

これらの施設と連携し、新たな海の駅、もしくは補助的な役割をもつサテライト施設を拡充することで、水辺をつなぐ“地域の足”のネットワークを構築していく

市営バスや市営地下鉄のような、横浜市民が便利に乗り降りできる移動手段として、通勤・通学、買い物や通院など、暮らしが便利になる交通ネットワークを既存の公共交通と連動して生み出す

電車の駅を中心に開発が進み、主要な駅周辺では慢性的な渋滞、駐車場の混雑などが問題になっており、海の駅を中心とした街づくりと併せて、車に依存しない新たな移動手段を増やすことを行政と企業一体で推進していく

水辺をつなぐ地域の足を実現するためのポイント！

安全  
であること


便利  
であること

低料金  
であること

魅力的  
な乗り物

環境に  
やさしい

身近  
であること



地図データ©2023 Google

<テーマ> ~海を横浜の交流拠点に~ Co-Sea Project

**Name :** K. Fujiwara **Group :** 3\_海班


横浜のこれからの「都市デザイン」を考える

# 未来会議

みらいかいぎ

## ~海を横浜の交流拠点に~

# Co-Sea Project



- ・「海」をきっかけに、立ち見、体験、登壇、運営など様々な距離感で関われるプロジェクト
- ・単体のイベントというよりは、通底するテーマ
- ・狙いは、潜在的な「地域内関係人口」の掘り起こし
- ・息の長いものばかりでなく、新しい人やイベントを積極的に取り入れる

▼背景

- ・「20世紀の企業における最も価値ある資産は生産設備だった。他方、20世紀の組織における最も価値ある資産は、知識労働者（＝人）」（ピーター・ドラッカー『ポスト資本主義社会』）
- ・横浜の最大の強みは、「圧倒的な人口」
- ・しかし、地域やまちに関心のある人は少なく、強みを活かせていないのではないかと。

→横浜の代名詞である「海」をフィールドに、地域と関わる市民（「地域内関係人口」）を増やす

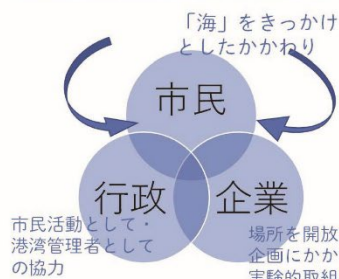
Name: R.Okuzawa Group: 3

# 横浜の うみの日

横浜の海を楽しむ、海辺のふれあい方や楽しみ方を体感する・つくる・自然に触れる・・・横浜の海の可能性をひろげ、門戸を開くために「横浜で、うみと触れ合う」を知る日。



SUPやサーフィン・浜遊び・水上交通による移動・ビーチヨガ・釣り・パラソルを出して海際でのんびり・海の家(カフェや屋台)・生物観察・・・

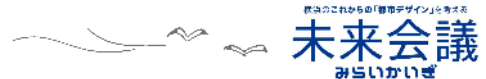


- タクティカルアーバニズムのように個々の活動や「うみの日」が少しずつ日常の活動としても定着する
- 実験的な活動のハードルを下げる・協力する体制づくり
- 企画を形にすることを通じいろいろな「海とかかわる」ひと・主体のコミュニティの形成
- 海のことを知る・気づく・海とかかわりを考えるきっかけに



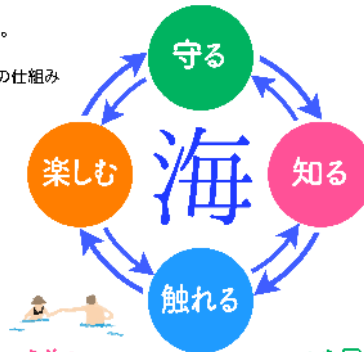
都心部(山下公園や臨港パーク)から始め、磯子、金沢、神奈川...それぞれの海辺でそれぞれの「うみの日」を展開したい

Name: H.Shinmura Group: 3 海をひらく



# 海の価値をアップデート! 横浜らしい海との暮らし

眺めるだけの水辺から、触れて楽しむ豊かな水辺へ。ひとりひとりが、思いのままに海を楽しむ海からの恩恵を、ずっと先の未来まで享受するための仕組み



**海や川の接点を増やす**

いつでもスイスイ水上移動!  
YOKOHAMA PADDLE STATION  
ヨコハマパドルステーション

水面に出るハードルをなく、誰でもいつでも海や川にアクセスできる仕組み。舟艇不登の小型ボートやカヤック、SUPなどを気軽に借りて楽しむことができるペイジックの水上車

**海の価値を知りそのすべてを学ぶ**

海を知って海を楽しむ教育の場  
OUGISHIMA MARINE COLLEGE  
駒岡マリンカレッジ

海と人がずっといい関係でいられるように、多角的に海について学べる教育の場を作る。授業はもちろん、海を活かした新しい事業創出なども

**生物多様性を回復、保全する**

自然の豊かさが都市の価値になる  
TAKASHIMA HIGATA PARK  
高島千鳥パーク

7日に約200万人が利用する横浜駅西口のすぐ東側に、ラムサール条約登録干潟が! 都市型の人工干潟を監視して生物多様性を実現して世界に誇れる公園にする

**海からの恩恵を手放しで享受する**

楽しくておいしい誰もが楽しめる海  
YUSEN POOL FLOATING RESTAURANT  
郵船プールフローティングレストラン

郵便物貯蔵庫、郵便プールと呼ばれる海辺の窓口として海上レストランを改造して食事を楽しみながら海を近くに感じられる場所

## ■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ>次のわくわく見つかる、ハマの海で

Name: サイトウユウ      Group: 海をひらく

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
みらいかいぎ

### 次のわくわく見つかる、ハマの海で

ぐるっと生活の場に囲まれた横浜の海。海を眺めれば次にやりたいことが見つかるようにしたい  
眺めた方向にあるミズベのモノコトの情報をARで風景に重ねて表示する

・対岸が見えるのは横浜の海の特徴

・実現手法の想定

Google Maps  
Review Scraper

イベント参加者  
ロコミ

現在位置の視野において見える地物情報の抽出  
→各地物におけるリアルタイムの情報取得

Unity  
AR Foundation

AR Foundationで情報表示  
→Android・iPhoneのアプリを製作可能

風景に重ねて歩いていく方向の「わくわく」を発見

地図データ©2023 Google



## テーマ4：水と農と緑のある暮らし〈郊外班〉

### ■ワーキングの帰着

#### 横浜らしい身近な「自然」とは

- ・タイトルは「生活を共に耕す ヨコハマライフスタイル」とした。横浜らしい身近な「自然」とは何か考えた結果、生活圏に点在する「小さい農地」「暮らしに近い森」、源流から海まで繋がる「変化に富んだ流域」の3点に集約した。
- ・コロナ禍を経て生活様式や価値観が変わった今、暮らしの身近に存在する横浜の自然が再評価される時代になりつつある。

#### 再評価の視点と取組案

- ・再評価の視点を「なりわい」「まなび」「くらし」と設定し、それぞれの視点から自然を生かした横浜らしい身近な「自然」の取組を検討した。
- ・「ReFarm」《価値の転換》  
増えすぎた駐車場を農地に転換する。
- ・「山荘教育のフィードバック」《価値の発見》  
小学校で行う山荘留学を身近な環境で実施し、農地、森林、河川等の自然を通じた体験学習により横浜の自然を幼少期から親しめる仕組みをつくる。
- ・「ヨコハマコモنزの形成」《価値の創出》  
自然環境がコミュニティの結節点となる。身近な自然を生かしたコミュニティのパッケージ化や新たなライフスタイルの在り方が形成される。

#### 将来50年の歩み

- ・人と自然が寄り添った生活様式への変化を進めていくために必要と考える取組を時間軸で整理した。



### アイデア 創発

#### ▼個人アイデアの発表

- ・オープンスペースでの焚き火によるコミュニティの創造
- ・阪東橋駅周辺の環境整備（緑化により大通り公園と大岡川のアクセスを向上）
- ・街中に市民が手を入れられる、触れられるグリーンを設置
- ・耕作放棄地の有効活用 ・自然を活用した駐車場の在り方の普及
- ・自分に合う自然への接し方・楽しみ方を探し、見つける体験の促進
- ・規制緩和による農地の活用促進

## ■グループワーク プロジェクト提案

<テーマ>生活を共に耕すヨコハマライフスタイル



**横浜らしい身近な自然の再評価**

**小さい農地** 生活圏に点在する小さい農地だからこそ独自産業や小さなケアが生まれる横浜

**暮らしに近い森** 宅地開発で消された森やまとまった樹林地がそばにある横浜

**変化に富んだ流域** 上流から下流、その先の海まで様々な流域環境がコンパクトにつながる横浜

**再評価の視点**

- なりわい 魅力ある生活に接した個人経営
- まなび 自然を通じた教育による地域への還元
- くらし 住む町横浜のブランディング・横浜ライフスタイルマネジメント

**ReFarm** ≪価値の転換≫ 増えすぎた駐車場を農地へ。

**山荘教育のフィードバック** ≪価値の発見≫ 一過性の体験から日常の風景に。

**ヨコハマ commons の形成** ≪価値の創出≫ 人を紡ぐ自然の結節点。





■個人ワーク プロジェクト提案

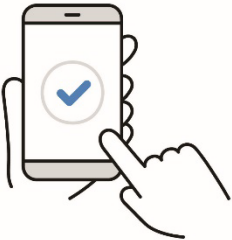
<テーマ>横浜で楽しむサブスク農業プロジェクト

Name : C.K Group : 4

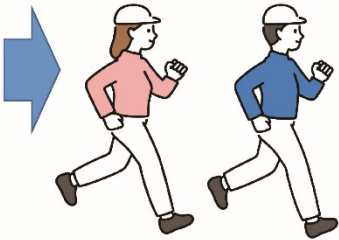
## 横浜で楽しむ サブスク農業プロジェクト

月額料金を支払えば、市内の農地と農業に必要な道具類を自由に借りて農業を行うことができる仕組み。

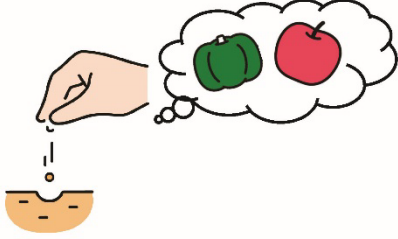
Step 1  
借りたい農地と道具を専用アプリで申請する



Step 2  
必要な道具が届いたら、利用申請した農地へGo!




Step 3  
自分のライフスタイルに合わせた農業を楽しむ



<テーマ>横浜ではじめる、農業 Y ターン特区・横浜 FARMERS

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
みらいかいぎ

Name : 齋藤 優太 Group : 4



### 横浜ではじめる、農業

## ターン特区・横浜 FARMERS

市内で人口減少が進み、かつ多くの農地を抱える瀬谷区・泉区「Yターン特区」と題し、移住者を対象に、就農支援を行います

**特区内規制緩和の一例**

- 遊休農地の無償提供
- 農地転用許可 (移住者の住居)

遊休農地


➔

住居  
良好な農地

**こんな暮らし方が可能に!**

- 平日→テレワーク、たまに東京の本社に出社
- 休日→富士山を眺めながら農業

**メインターゲット**  
⇒「分区分の広さでは物足りない。もっと広い場所で耕作をしたい。」と考える東京都民



東京  
瀬谷  
泉

東京部心から  
直通1本1時間!

横浜のこれからを「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
みらいかいぎ

**Name: taichi k Group: 4**

## 焚き火が紡ぐ ヨコハマGreenコモンズ

公園や市民の森、河川敷、公開空地などのオープンスペースにおいて、近隣樹林地や公園、街路樹、個人の庭等の管理作業により発生した木材をアップサイクルし、周辺環境の特性を活かしながら、市民同士が年齢・性別・立場・障がいの有無等を問わず自分らしさを発揮し、つながり合える場を市内全域に展開していく（生活圏に1か所）。

**出番**

**食べる**

**チル**

横浜のこれからを「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
みらいかいぎ

**Name: 野澤 雄佑 Group: 4**

## 地域内の資源循環により“生きる力”を得られるまち

**ハード面 (例)**

- ✓ 後継者不足の農地や耕作放棄地等を活用し、多種多様な市民が集う広場や市民農園に。  
売電収益によって持続可能な活用へ
- ✓ 既存の駐車場をEVカーシェアリング用途とし、その際に不要となった一部用地を緑地として自然を感じられる場に、非常時には太陽光発電 + EVによる非常用電源の共有場所に。  
EV+太陽光  
緑地化  
利用料収入

ヒト・モノ・カネ  
循環

**ソフト面の (例)**

- ✓ 多様な市民が集まるワーキングの開催@耕作放棄地活用場所など。
- ✓ ジェンダー平等による共感を基盤にした資源調達力向上による地域防災力の向上へ。

■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ> ちょっと気にかけてみる暮らし～生活を共に耕すライフスタイルに向けて～

Name: 長谷井裕久 Group: 4\_水と農と緑のある暮らし\_陸班

## ちょっと気にかけてみる暮らし

～生活を共に耕すライフスタイルに向けて～

植物とのかかわりのようなケアのある暮らし。ちょっと気にかけて、気遣って手をいれられるグリーンを街なかに増殖させる。水源から海に広がる河川はロングトレイルへと整備され、際には河川利用のアクアポニックスの設置、街路樹は協生農法の果樹一本分のシネコポータルのポッドにし食べられる街へ。公共にあるこれらのものは誰でも手を入れられて、食べられる。いつでも植物の様子を気にしながら、いろいろな人と気を遣いながら、植物を中心にケアのある暮らしへ。学校や施設などではエディブルスクールヤードを。手に入れられる森林などはフォレストガーデンに。採れたお野菜を飾ってみても楽しいかも。

さわれる緑を町中に

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える

### 未来会議

みらいがいき








シネコポータル: 拡張生態系入門キット: <https://www.sonycsl.co.jp/tokyo/12113/>




<テーマ> ROUTE BANDOBASHI

Name: Tachiyama Haruka Group: 4

## ROUTE BANDOBASHI

大通り公園～阪東橋公園～富士見川公園～大岡川を一連の歩けるエリアにする。歩きながら水辺～緑～市街地へつながるエリア作り。  
(文化的エリアの黄金町ともつながる！)


- 大通公園は阪東橋駅で行き止まり感もあり、暗いイメージがあることも。
- 大岡川～富士見川公園は阪東橋公園と近いが、駐車場によって分断されている

→駐車場の緑化によって富士見川公園から阪東橋公園をつなぎ、住宅街の中の閉鎖感のある公園から開放感のある公園へ

→大通公園の緑化の再整備、余剰空間の活用によって地域のコミュニティの場となる公園へ

地図データ©2023 Google

エリア：  
黄金町～阪東橋  
～伊勢佐木長者町





## テーマ5：横浜のコミュニティ再生〈コミュニティ班〉

### ■ワーキングの帰着

#### 自分と他人が好循環するコミュニティ

- ・現況のコミュニティを考えたときに、家庭や趣味といった個人寄りのものと、自治会のような他者寄りの二極化があるのではないかと。両者は思い思いに活動しながらもどこかで互いの利益になるような仕組みを考える。
- ・そこで実現したい暮らしとして「やりたい！好き！とくい！が巡ると、満足が広がる」暮らしの提案をしたい。
- ・やりたいこと・すきなこと・とくいなこと、はストレスなく続けられる。これが、コミュニティ存続のためのパワーの源と考えた。このパワーが小さな場所から市全域までマッチングして、好循環をもたらす暮らしを理想としている。

#### 50年後のコミュニティ

- ・より多様性が尊重される社会になり、細分化されたコミュニティに自由に所属・離脱できる社会が理想と考える。
- ・対話や活動の場であるコミュニティ拠点の整備には、官民間問わず参加者が共同で負担することで、利用者の意向を反映した場を整備する。

#### 実現までのロードマップ

- ・個人、民間企業、行政主導の社会実験と様々な主体によるコミュニティ形成がスタートする。
- ・魅力的な担い手の出現によりコミュニティの意義が普及し、コミュニティ量が増えていくことで住民の満足度が高まる。これらが継続し、30年後には公民が混ざり合って成熟していく。
- ・デジタルによる生活環境の変化や、有力な担い手の大きな投資によって、想像より早い将来に実現する可能性がある。



#### アイデア 創発

#### ▼坂倉先生との意見交換

- ・幸福と感じられる要素は既に分かっている。実現に向けて都市をデザインすることが重要。
- ・暮らしは住居と周辺環境を含む豊かな概念。住まい周りのコミュニティも含めて暮らしだという考えが広がると、その人のウェルビーイングが高まると思う。
- ・プロジェクトはひとりではできないことを皆でやるのが趣旨。各自の意欲だけでなく、自覚や責任を持たせることが必要。
- ・コミュニティと地域自治組織は担う分野が異なるので、共存している。お互い役割が違うことを認識し、イベント等の開催時には協力している。

## ■グループワーク プロジェクト提案

<テーマ>やりたい！好き！とくい！が巡ると満足が広がる



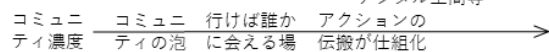
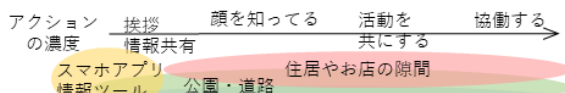
### 横浜のコミュニティ「やりたい！好き！とくい！が巡ると満足が広がる」

#### 1 50年後のコミュニティイメージ

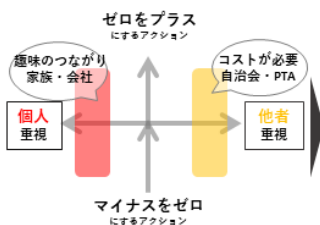
- 人口減少、住まい方/働き方の変化
- 属性（国籍/障害/年齢）、価値観、好き嫌いなど多様性を尊重しあうのが当たり前  
→コミュニティのあり方も多様化し、多様性を尊重・活かす
- コミュニティは従来の「家族」「会社」「趣味」からより細分化、泡のように存在したり消滅したりしながら大小濃淡さまざまに形成→自由に選択し所属できる社会へ
- コミュニティの基盤強化→共助が可能な、安全安心な社会に

#### 2 具体的なアイデア

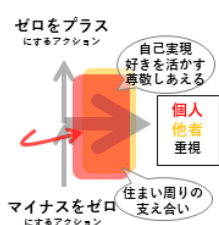
- “コミュニティの濃度に応じた場所づくり”を都市デザインにしていく
- 用意されたサービス消費だけではなく、個人自らがアクションできるような仕組・余白をデザイン



#### いまあるコミュニティ



#### 未来に求めたいコミュニティ



- コミュニティ拠点整備の担い手は公民問わず、みんなが少しずつ担う → 公共財源を効率化・コミュニティ形成の関係人口増（みんなで作るcommonsのような概念）
- デジタルがよりわかりやすく楽しいコミュニティ形成に活用される（Ex.コミュニティの入り口となる、ありかを可視化する、DX体験やゲームといったコミュニティのコンテンツになるなど）
- デジタルは、障害の有無や言語の違いといったバリアもフリーにし、コミュニティメンバーの多様化が進む

#### 50年後のアイデア① “みんなの多目的道路”

人口減少地域の道路、補修をする際にこれまでの当たり前を見直す

- ✓ フルスベック必要？  
⇒ 交通量少ないから最低限でいいよと住民
- ✓ 税金だけで修繕は持続的か？  
⇒ クラウドファンディング実施
- ✓ 多目的化すると参加者が増加  
⇒ 店舗が一部整備費を出資する条件に時間を限った青空営業をさせてほしいと参加  
・ 整備しきらない範囲に近隣住民でアウトドアチェアを出せるスペースと備品購入
- ✓ 道路から始まる公共空間と住民によるまちづくりの広がり  
⇒ 地域住民の出資で道路沿いに憩いの空間を創出  
・ 地域に住んでた造園職人と住民で植え込みスペースをDIY







■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ>みんなの資産をまるごとシェア

**Name:** 高村典子      **Group:** 5

「やりたい! すき! とく! が巡ると満足が広がる」

## みんなの資産をまるごとシェア

未来のヨコハマは「サービスを自分たちで作出す社会」へ

30年後、50年後も利用されていない施設(遊休施設)は発生する。団地、学校、店舗、空家、倉庫、道路なども「みんなの資産」ととらえ、期間限定で市民がどんどん活用していくプロジェクト。

地域のまちづくり団体に管理権限を委譲し施設の所有者との間を調整、施設活用のハードルを下げる。地元で自分たちの居場所やサードプレイスができることで、住み続けたいまちになる。みんながやりたいこと、好きなこと、得意なことをシェアし合うコミュニティが自然発生していく。

たとえば...【学校施設の活用事例】

**むろと廃校水族館 (2018) 高知県室戸市**  
 廃校になった旧稚名小学校を「むろと廃校水族館」としてオープン。地元の定置網にかかったウミガメや魚がプールや教室の水槽でゆったりと泳いでいる。年中無休、毎日が参観日。  
 イラストはむろと廃校水族館のSNSからお借りしました

**いいづなコネクト WEST (2020) 長野県飯綱町**  
 閉校となった旧半乳西小学校で、2年間の社会実験「未来のこどもラボ」を経て改修された自然・スポーツ・健康をテーマにした自然体験交流施設。旧職員室は「とちのき食堂」へ。サッカーグラウンド、ランドリー、フィットネスジム、コワーキングスペース、宿泊設備などを備える。

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
 みらいかいぎ

<テーマ>ダンチのみんなのよはく PJ~団地のバス停から循環するコミュニティ~

**Name:** 楠本 藍      **Group:** 5

「やりたい! すき! とく! が巡ると満足が広がる暮らし」

## ダンチのみんなのよはく PJ - 団地のバス停から循環するコミュニティ

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
 みらいかいぎ

「やりたい!」を叶えやすい綜合スペースとして、住民が1日に1~2回は立ち寄るバス停に! おおきなモビリティ拠点を設置して! バス停周りが新たな住まい周りのコミュニティの場!

●いまある団地の仕掛け事例と本PJのターゲット

やってみたいの自由さ

左近山 アトリエ (芝山団地 雑居用)	シェアカッチン・ギャラリー	左近山 アトリエ (芝山団地 雑居用)
団地キッチン 田島 (田島団地 雑居)	シェアカッチン	団地キッチン 田島 (田島団地 雑居)
やまわけ キッチン (赤山台団地 汎用)	食生活サポート	やまわけ キッチン (赤山台団地 汎用)
NEIGHBOR FOOD PLACE (米平団地 雑居)	食生活サポート	NEIGHBOR FOOD PLACE (米平団地 雑居)

サービスの享受

●拠点のハードイメージ

① 僅か活動が天候に左右されない  
 ② 少人数すぎない集まり可能な大きさ  
 ③ 僅か手続に手配がない (確認申請不要、公道公園には設置しない)

●運営体制

住民 業種 企業 区 区民 区民会 区民会 区民会

住民 業種 企業 区 区民 区民会 区民会 区民会

●収支イメージ

【場所代】 ¥0      【設備代】 応接者の支援      【おカネ・人件費】 応接者の交際自治会費

「やりたい! 利用したい!」の負担を極力なく!

●将来のビジョン

【短期】 実証実験による、循環コミュニティの浸透  
 【中期】 鉄道駅より身近な駅住まい周りの徒歩利用であるバス停のあり方の変化  
 【長期】 「みんなの余白」のある都市デザイン/建築計画

※住まい周りのコミュニティ単位の進化 (仮見)

石井亜紀子 テーマ5 「やりたい！好き！とくい！が巡ると満足が広がる」

## 団地で叶えるちいき子・孫育て

「孫」は幼いお子さんだけでなく、幅広く！  
幼い子ども、若い親世代、留学生、若い転入者、障害者...

**各人々の・・・**

高齢者 ⇒ 「子どもたちと交流したい②」「健康でいたい③」  
外国人、障害者… ⇒ 「コミュニティの一員として認められたい②」

子育て世帯 ⇒ 「地域による子育て支援がほしい③」  
子どもたち ⇒ 「いろんな遊び・学びを体験させたい②」

**団地空間の・・・**

居住者減少による ⇒ 空き店舗多い② 集会所の利用頻度減③  
公園の子ども利用減 ⇒ 子ども用プールも使われず②  
若い住民の減少 ⇒ 公園の維持管理の担い手減③

**<課題>**

空き店舗多い② 集会所の利用頻度減③  
子ども用プールも使われず②  
公園の維持管理の担い手減③

**<やりたい・好き・得意>**

「手芸が得意④」「屋間の時間はある④」「見守りはできる④」  
「母国の文化を知ってほしい④」  
「作業が正確④」「体を動かすことが得意④」「PCができる④」  
「体力がある④」「情報発信に慣れている④」  
伸びしろ④「笑顔④」「好奇心④」

**<強み・可能性>**

ゆったりとした空間、かつては行事も盛んでノウハウある  
大人がプールを何かに使ってもいいよね  
今なら遊具も使いたい放題、公園でガーデニングもできる  
+フラットに移動しやすい

**巡らせる**

**<巡らせるための空間活用を含めたプロジェクト>**  
子ども用プールの多世代化プロジェクト：「みんなの足湯」お出かけを促す、担い手発掘、多くの人が参加しやすい  
ちいき子・孫の見守り拠点：公園・広場に隣接する集会所や空き店舗で「みんなの茶飲み場」

- ・大人が子どもを見守りながらお茶できる
- ・高齢者自身も見守られる
- ・知り合いになっていく⇒相談もしやすい関係づくり（個々の巡りへ）
- ・住民の得意を生かした交流（多国籍スイーツ、音楽）
- ・拠点では、公園・広場に隣接する壁をオープン化して  
誰もがふらっと立ち寄れる
- ・住民の得意を生かした情報共有も（SNSなど）






市内某大規模団地での夏祭り  
在住外国人も楽しむ

大規模団地内の豊かな屋外空間は住民交流の場

市内の某大規模団地の集会所の配置  
資料内の地図は筆者作成、写真は筆者撮影


**誰もが地域パパ・ママ、地域じいじ・ばあばとして大事にされるまち**

Name: 林 彰広 Group: チーム5\_横浜のコミュニティ再生

## Yokohama College Project

「やりたい！好き！とくい！が巡ると満足が広がる」を目指して-

**What (YC Project とは?)**



様々な経験（まち普請、公園愛護会、団地の取組...）をしてきた**市民**が何かしらをやりた  
い、もしくはそれに気づいていない**市民**に経  
験を共有し、「**やりたい**」を醸成・育む場



道路を使って道行く人にも活動を自然とみてもら

**Who (プレーヤーは?)**

基本的プレーヤーは市民

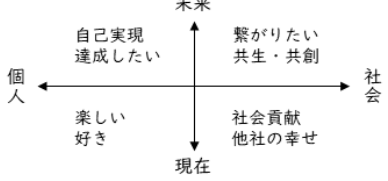
**Where (どこで?)**

・各地域（小規模単位）  
・駅前の公園や未利用地  
(開かれた空間で)

出典: 横浜公園 横浜市トップページ  
<https://www.city.yokohama.lg.jp/hodosaya/shokai/koen/list/130.html>

**Why (目的は?)**



個人 ← 未来 → 社会

自己実現 達成したい ↑ 繋がりたい 共生・共創

楽しい 好き ↓ 社会貢献 他社の幸せ

現在

- ・コミュニティはプロセスの中で
- ・空間デザインもプロセスの中で
- ・面白い地域に面白い取組が集まる

**内発的動機の醸成・育み**

**When (どの期間で?)**

	現在	10年後	20年後	30年後	40年後	50年後
気づいてない人		面白いことやってる	やりたい・試行錯誤		教える・共有	
やりたい人		やりたい・試行錯誤		教える・共有		
経験してきた人		教える・共有	更なるコミュニティづくり・コミュニティのプロ			
横浜市		何を守り、何を許容するのかを明確に 体制の構築		成熟コミュニティの評価・賞		

GOOD COMMUNITY 100UD award



## ■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ>自分らしい暮らしのヒント発見タウン

### 自分らしい暮らしのヒント発見タウン



#ダイバーシティ #ウェルビーイング #インクルージョン  
#ボトムアップ #シティカスタマイズ #ライフスタイル  
#コミュニティデザイン #コミュニティエンジニア

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える

## 未来会議

みらいかいぎ

STEP1: 暮らしの中で「やってみたいこと」を出してみましょう



### クラシカスタムヨコハマ

- 公共掲示板（まちの広告板）の仕様変更活用
- 市民利用施設の一部をコミュニティマネジメント特区に
- アナログとデジタルの可視化をさせるべくコミュニティエンジニアの育成

<テーマ>まち部を楽しもう～～！

name : HK グループ5

## タイトル：まち部を楽しもう～～！

50年後は・・・

- 子どもが減ってきたり、先生の負担を減らすため「部活」のあり方が変わってくるかも。
- 働き方が変わってきて、労働時間が減り、夕方から夜にかけての時間と休日を地域や自分の好きな場所で過ごせるようになるかも。
- デジタル空間とリアル空間の過ごし方が更に自由になるかも。
- 仕事も複数持つ時代。地域での副業が活発になるかも。
- 両親とも働くのが当たり前なので、夕飯は台湾屋台のように外食中心になるかも。
- まちの中にアートがあるのが当たり前になる。アートへの理解が深まる。

【まち部が活躍】

- 中高生の部活の一つにまち部ができる。地域の大人達と一緒に活動することもできる。まち部はプロジェクト制なので、常に一緒にいるわけではなく、まちへのしかけごとにメンバーが変わる。中高生がまちに出る機会になる。まち保育の思春期版。
- 発表の場、公表の場が増える。アートの敷居が下がることにより、身近になり、理解が深まる。
- 個人それぞれは好きな活動をしているだけだが、結果的に地域にお金を落とすことにつながったり、活性化につながっていく。
- まち部は、ボランティアと稼ぐの境界が曖昧。

すき！とくい！やりたい！が巡ると、満足が広がる



**フットサル部**  
運動する人がまちのあちこちに登場。公園での活動がDXで予約しやすくなる。公園に関わる人が増えて、その人達が管理をするようになる。



**歌・演劇**  
公園、駅など披露の場が盛りたくさん。DXの推進で予約も楽々。有料イベントも可。若いアーティストの資金源となる。出身アーティストは地域が応援



**食べる部**  
夕方になると屋台が出る。お店の人は副業で、曜日ごとに出店者が変わる。保育園周りの親子が食べて帰ったり、家におかずを持ち帰る。



**まちアート部**  
まちを舞台に作品を作成。例えば、地域の皆で編み物の編み地を作成してまちの植栽に飾る。こんなアートがまちに日々増えていく。



**DIY部**  
持ち主不在の空き家を安く仕入れ、リノベーション。売れば活動資金となる。地域拠点として集会スペース、シェアオフィスなどに活用することもある。

例：  
グレーシア横浜十日市場マンション敷地の一角にステージがある

例：  
十日市場ヤーンボミング多くの人の作品がまちを彩った

46



## ■個人ワーク プロジェクト提案

<テーマ>公共・私有地どこでも持続可能なコミュニティスペース化PJ  
 ~わたしの居場所はまちのあちこちにある~

Name: 植松 詞子 グループ: テーマ5 (コミュニティ)

実現したい暮らし: 『コミュニケーションを介して得る 丁寧な暮らしを通じて』 幸福をより感じる暮らし

公共・私有地どこでも持続可能なコミュニティスペース化PJ @相鉄線星川駅付近  
 ~わたしの居場所はまちのあちこちにある~

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
 みらいかいぎ

**本PJのPOINT**

- コミュニティ拠点となる場所をまちに挿入していく
- 結果コミュニケーションが増えたり、丁寧な暮らしづくりに寄与し、幸福感を生み出すことを意識
- 人が自然と集う動機を意識して計画する
- 持続可能性を意識した計画を描く
- 上記を意識したコミュニティ拠点をエリアの各所に実装していく

**CASE1: 区役所付近の公開空地を活用**

- スペース活用のイメージ
  - 平常時はアウトドアファニチャーを自由に利用
  - 週末にはマルシェや青空ライブラリーなど開催
- スキーム: 有志住民と区役所、図書館、民間企業、地元商店などで組成したエリアネ組織に指定管理、行為許可
- PJのあゆみ...区役所主体でファニチャーを配備するクラウドファンด์を立ち上げ
  - クラウドファンダーから有志で活用コンペを開催→イベントを開催
  - 主催者が固まってきたので組織化

**CASE2: 保土ヶ谷公園PJ事業**

- 事業イメージ
  - ラグビー場・球場の民営化と公園を民間活用、地元大学やクラブチームなど複数のチーム拠点化
  - 民間資本でアスレチック、商業、アウトドア施設等を整備・運営
- 趣味をきっかけに広がるコミュニティ
  - 地元のチームを応援! 野球を見ながらビールを飲む
  - 週末の夜は焚き火を囲んで過ごす! 星川のアウトドア好きが集う
  - サステナブルファームで農と食を通じた交流

**CASE3: 川辺公園・帷子川の親水スペースPJ**

- スキームイメージ: 川辺公園のPark-PH事業
  - コミュニティイメージを見据えた公募要件にしておく
- 拠点の活用とコミュニティのイメージ
  - 親水空間づくりのワークショップを開催、流れをみんなで計画しよう!
  - ピオトープづくりと生態研究



<テーマ>ヨコハマ都市デザイン・アワード

横浜のコミュニティ活性化  
**Name: Toshihisa Madachi Group: 5** やりたい! すき! とく! がめぐる満足がひろがる

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
 みらいかいぎ

**ヨコハマ都市デザイン・アワード** ~未来に向かうセンス・メイキング~

横浜のランドスケープデザイン事務所が  
 団地商店街にカフェ兼拠点を置きながら  
 まちぐるみのフェスティバルを  
 コーディネート

人口減少と高齢化が止まらない  
 横浜郊外部の左近山団地  
 最寄り駅が東京直通となり  
 子育て世帯の注目を集める?

コミュニティ活性化のすべてが  
 都市空間の創造を目指しはしない  
 それでも  
 横浜の都市デザインとして  
 認められるのだろうか?

提案は  
 区ごとに選出された候補者と専門家が  
 都市デザインの未来を語る  
 その対話のなかで賞がきまる

区役所がひとを繋ぐ  
 アクションが賞に向かって地域をめぐる?



行政課題と繋ぐ  
 行政の問いかけに市民が答え  
 専門家と都市デザインの文脈に載せる

想いの具現化  
 住民の噂ばなしを未来志向でまとめると、  
 地域にとっての価値が見えてくる

価値の見える化  
 企業が  
 ビジネス化すると、  
 地域の価値が  
 様々な言葉で拡散される

Yarigai-Diagramのアレンジ  
 お金になる  
 褒められる とくい

アート思考の持ち主が  
 想いを具現化すると、  
 多様な属性の方も繋がるテーマで  
 コミュニティがうまれる

地域・商店街活性化、空き店舗活用  
 福祉・教育・文化活動支援

北沢福祉保健計画  
 地域活動プラットフォーム  
 地域人のコーディネート

自衛隊活動支援、市民防衛  
 公民連携、共創、リビングラボ

左近山町地のみらいの妄想  
 区役所が空き家を活用したコマ芸術不動産をコーディネート  
 ▶芸術家がまちぐるみでシブ  
 ▶制作 ▶アート、福祉、教育分野で 地域人材が日常的に交流 ▶事業者が子育て世帯向けの リノベーション住戸を販売

左近山クリスマスフェスティバル! (2022.12.25) ☆「日曜は北のクリスマス会」NPO法人オーラさくらやま ☆「アドエからのクリスマスプレゼント」左近山アドリエ131110 ☆「左近山ドリームパーク」左近山小学校4年2組 ☆「焚き火の夜」アドエ音楽部・コンサート 左近山14-2 他 ☆「イラスト似顔絵」しいいせ ☆「フリーマーケット」オールさんやま 左近山14-2 左近山アドリエ 他 ●カルタ ルースフードトラック/Quattro KITCHEN ●コーヒースタンド/からこBOX ●ホトシノクリーム&カフェ菓子/ un petit cadeau (川崎尚子) ●ホトシノク/左近山アドリエ131110

Name: Maho.s

Group: Group5 横浜のコミュニティ再生

横浜のこれからの「都市デザイン」を考える  
**未来会議**  
みらいかいぎ



## やりたい! すき! とくい! が巡る さくらタウンプロジェクト



### 1. 関内桜通り周辺について

- ・芸術不動産による防火帯建築の活用
- ・アーティスト・クリエイターの集積
- ・関内外OPENなどでの道路の活用

既に行われている  
→より活性化できないか?



### 2. 提案概要

都心部×コミュニティ

= 「住む人にも訪れる人にも魅力的なまちづくり」が必要

- ・コミュニティ班の提案と、都心班の提案をMIX.

車両規制⇒カーフリーでウォークアブルな街をつくる

遊戯道路化⇒道路の管理修繕を行う代わりに、周辺に住む人や働く人、お店が道路空間を自由に活用できる（カフェやお店、遊び場の展開、アスファルトアートなど）  
みんなで作る道路! →コミュニティが活性化

### 3. 未来の姿

- ・アーティスト・クリエイターや新しく事業を始めたい人のチャレンジが広がる
- ・芸術不動産の取組がより推進され、テナントの入れ替わりでより魅力的で地域に合った企業等が入居してくる。
- ・車両規制×遊戯道路エリアがより広がり、関内のまちで「日本版15分都市」が実現。訪れたい→住みたい、と思うWell-beingなまちに（歩けるし楽しい）



## 個人ワークへの講評

各グループの個人ワークに対し、都市整備局企画部 樹岡部長、メンターの三輪先生と野原先生より講評をいただいた。

### 都市整備局企画部 樹岡部長

(定義班)

多様性を生かしたまちづくりに関する発表が多く、数十年前から個性の発揮に関する議論があったが、フェーズを変えて再び表れる部分は面白い。

(都心班)

都心部にまだ財産が眠っていることを表している。行政も襟を正して頑張りたい。

(海班)

横浜市の海は、国際的にみても良い環境といわれる。こんな都市はほかの国にない。鶴見から金沢まで広がる海を生かしたまちづくりを行いたい。

(郊外班)

市街化区域と市街化調整区域が入れ違いに存在する都市構造により、農地と都市部が近接した環境が形成された。この利点を生かしていきたい。

(コミュニティ班)

行政では思いつかないアイデアが多くあり、コミュニティ形成は難しい課題と言われる中でも、身近なアイデアが種になることが分かり刺激になった。



### 三輪先生

- ・未来会議を経て感じたことは、「コミュニティ」に関する議論は結論が出づらいことが分かった。各々がコミュニティと定義する範囲が異なり、「どこまで」繋がることを理想とするのか、その考えが一つになりづらい。これはそのまま横浜市のみ

- ちづくりが直面している課題でもあると考える。
- ・福祉領域の言葉（「育てる」「ケアする」「フォローする」等）が多く使われている（一般化してきている）ことが印象的。それを「どこの、誰に」といった空間的なことと合わせて議論することに、都市デザインからのアプローチが見えてきていた。
- ・今後の都市デザインを考える上で、あるテーマで通貫し全市で捉えていく考え方に可能性も感じた。例えば「うみの日」とか、都心の海に近い暮らし vs 郊外の海から遠い暮らし、といった対比関係ではなく、オールヨコハマとみて同義としていく視点があっても面白い。



### 野原先生

- ・「自動車の台数が多い」という意見は面白い。自動車は歩行者とのコミュニケーションが少なく、便利な反面失うものも多い。
- ・都市デザイン室は、都市デザインと異分野（歴史など）の掛け合わせで都市デザイン分野を拡張してきた歴史を持つ。行政的施策で解決するための施策を検討していく必要がある。
- ・プロジェクトタイプは自分たちで進め、普及していくための仕組み化が重要。行政が牽引するか、民間で資金を集めて進めるか方法はいくつかあるが、40のアイデアが具現化できるとよい。





# 4

## これからの都市デザインに向けて

### これからの都市デザインの考え方

#### ■中心となる考え方

「ウェルデザインの都市づくり」

- ・ ウェル（丁寧）な都市デザインと、生活する人々のウェルビーイング（幸福、満足な状態）を実現する都市デザインの実現という2つの意味を持つ。（具体例）
  - ・ 市民個々のウェルネスを実現する都市づくり
  - ・ 丁寧にデザインされた都市
  - ・ 自分を表現できる豊かな公共空間とそのしくみ

#### ■ウェルデザイン都市実現のための基本戦略

- ・ 都市には市民個々の目線（アイレベル）と市全域を俯瞰する目線の両方が必要であり、双方をつなぐ役割として都市デザインがあると考えている。
- ・ 過去の制度や手法をアップデートし、横浜が先導的な役割を担うことが必要である。地球環境や福祉といった、これまでと異なる視点を加えていく。

#### ■今後の都市デザインの展開

- ・ 都心部機能の再強化や、海岸線沿いの魅力向上に加え、郊外と呼ばれている内陸部の個性を見出し

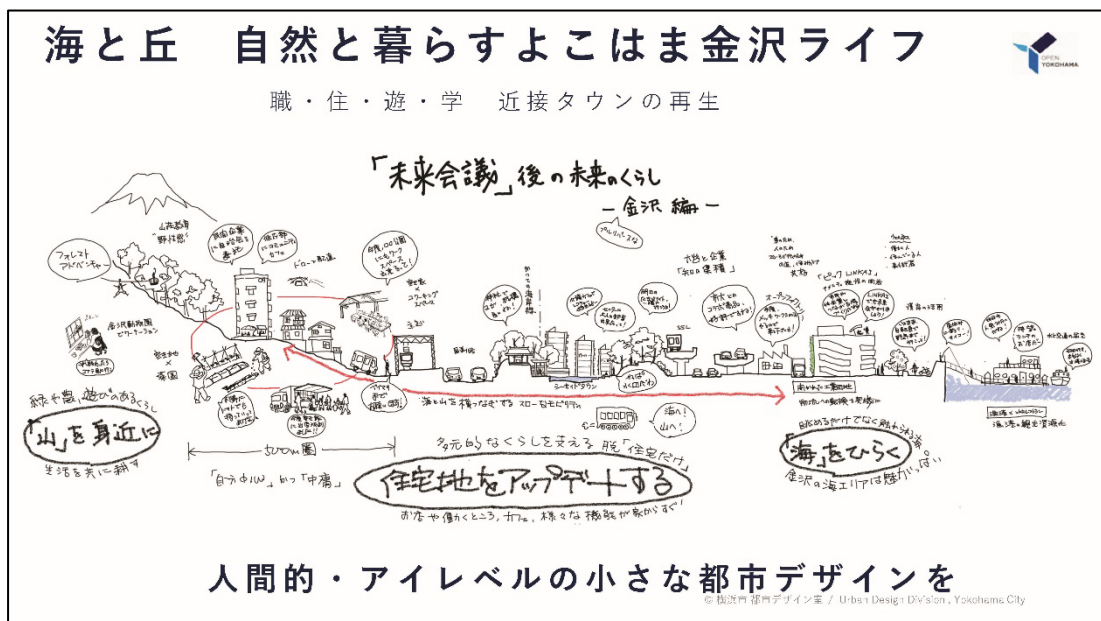
新たなライフスタイル拠点を創出する、「多中心な都市・横浜」の実現に向けた将来像を描く。

#### ■これからの取組みイメージ

- ・ 未来会議で挙げていただいた意見を参考に、都市デザイン室が今後実践するイメージとして「未来ワーク」を紹介する。
- ・ 海、山、住宅地といった横浜市の構成要素を全て備える金沢区をモデルケースとし、それぞれの要素をアップデートすることで、横浜市全域の都市デザインを捉えなおす一歩としていきたい。



- ・ 他地域への展開に向け、未来会議の意見を参考にしながら各地域の検討を行うと同時に、これからの都市デザインを考えていく。



## 【未来会議】を踏まえたこれからの都市デザインの方向性

「未来会議」で行われた、横浜の都市デザインを専門的視点から示すレクチャ、及び将来の横浜を考える上で討議した各地域の個性や課題、そして取り組むべき新たな潮流を見つけるワーキングの結果から、これからの都市デザインの方向性として配慮すべき事項として以下のように整理することができます。

### ①これまでの都市を継承しつつ、新たなニーズに対応すること

- ・横浜の都市デザインの理念「魅力と個性ある人間的な都市の実現」を継承しつつ、7つの目標を現在に合わせて再設定していくことの必要性
- ・都市デザインに基づき形成された「横浜ならではの」都市を残し、使いこなすことへの期待感が感じられること

### ②固定観念にとらわれずチャレンジしていくこと

- ・従来制度ではできなかったことも含めて、コミュニティ形成等に資する個や地域のチャレンジを展開できる環境をつくること
- ・個人ワークでのアイデアのように、色々な人が考え、周りを巻き込みながら展開できる仕組みを見い出すこと
- ・建築や都市のハード分野だけでなく福祉や教育などの別領域との連携をすること

### ③ボトムアップでイノベーションをおこしていくこと

- ・多様な価値観を持った一人ひとりが集まり、暮らし、活動する都市部で、個々の価値観を損なうことなく自由に選択肢、個々のウェルを高めることができる都市をつくること
- ・個々のウェルを高めるコミュニティへの参加を展開しながら、新たなイノベーションをボトムアップで生み出していくこと

### ④コミュニティの場を官民でつくること

- ・魅力的な担い手が生まれてくる期待がある中で、住民、企業、行政等が同じ視点で参加できる場の形成が期待されること
- ・様々な人の暮らしの圏域の重なりになり得る公共空間のつくり込みが重要となること
- ・個々の暮らしに合わせた柔軟なコミュニティを形成するとともに、多様な人どうしの出会いを創出し、新たな活動を創り出すこと

### ⑤身近な生活圏の価値を見直し、一人ひとりが暮らしを選択できること

- ・「都心⇔郊外」という二元論的な価値観でなく多様な選択を重視した多元的な価値観を実現すること
- ・ローカルアイデンティティの視点で、身近な自然や水辺を再評価して暮らしに取り入れるなど身近な生活圏の価値を見直すこと
- ・生活圏、流域など対象とする圏域を適切に設定すること

これまでの50年の都市デザインの理念は継承しながら、  
確定することのできない時代に合わせ、随時カスタマイズしていくことが必要



## お問い合わせ

横浜市 都市整備局企画部都市デザイン室

TEL 045-671-2023 E-Mail [tb-toshidesign@city.yokohama.jp](mailto:tb-toshidesign@city.yokohama.jp)